

# VERDA MONTETO

Redaktita ĉe MAEDA Yonemi (*dumonata*) N-ro 91

## エスペラントでの出会い (1995年) その3

FUKUMOTO Hirotsugu

イタリアのミラノからはバスでモナコ公国のモナコ市を通過してニースに来たが、ニースからは同じバスでマルセイユに向かった。途中は海岸部は通らずに、内陸部のエキサン・プロヴァンスの町を経由して行くことになった。この地方は最近日本でも有名になってきている所で、フランスの第二の都市である港町マルセイユの北方20km程のところにある。行く前は小さな田舎町を想像していたが、そうではなくて、人口は少ないが、町中の通りには彫像や噴水のある広場がある、とても素敵な南仏の町である。この地方では大学の内、理学部・工学部系統はマルセイユ



(中心部のロータリーにある噴水と、彫像が町の雰囲気象徴している)

(歩道の広さと、並木の様子がよく分かる、公園、噴水もきれいだ)



に、文学部などの人文系学部はこのエキサン・プロヴァンスに設置されていて、日本からの留学生も多数住んでいるとのことである。1時間ほど町を散策したが、観光客も多いのか、それとも地元の人たちなのか、人通りは多い方である。大通りには両側に車道と同じくらいの幅の歩道が並木に挟まれて続いている。その側には、ちょっと田舎っぽい趣もあるがなかなかしゃれたブティックやカフェー（喫茶店）もあり魅力的なところである。この町の人々はおしゃれをしているので、ここのファッションも有名だそうです。

昼食はマルセイユについてから、港のそばのイタリア系のレストランですることになった。バスの運転手さんの紹介である。食事のあと、港を望む見晴らしの良い丘の上にあるノートルダム・ド・ラ・ギャルド寺院に上がった後、3時過ぎに丘の下の港の入り口の近くにあるホテルに入った。夕食は昼と同じレストランで食べるようになっていたので、食事まで自由時間ができた。

町の中心まで1 km ちょっとなので、歩いて出かけることにした。目当てはサートの名簿に出ている住所で、ホテルのフロントで聞くと中心部の大通りの場所である。「コ」の字の形に入り

(港から丘の上の寺院を見上げる。港にはたくさんの帆船が泊まっている)



こんでいる港の奥まで歩くと、そのあたりから中心部の大通りが始まる。この港の両側も大きな通りがあり、港の入り口の海底下の地下道でつながっているので、環状道路になっている。

マルセイユでは数人連れの韓国人には出会ったが、日本人観光客は少ないのか通りではほとんど見かけなかった。歩道には物乞いをする乞食もみられた。マルセイユはあまり治安が良くないとのことである。アフリカへの窓口になるのか、黒人やアラブ系らしい人たち、通りは人種が混ざっている。

フランス語は全く分からないので、紙に書いた住所を見せて、警官に英語で訊ねる。住所の表示が出ていたので、わりあい簡単に建物は見付けることができた。中に入って受付の所で訊ねてみると、親切に案内してくれたのだが、3階、4階と探しても見つからない。名簿と日程表には出ているのでありそうなものだが、何の形跡も無い。結局色々探したり、聞いたりしてみたが言葉も通じず、良く分からないまま、今日はやっていないのだろうと推測して、あきらめて帰ることにした。入り口に戻って玄関ホールを見回していると、エスペラントのポスターを発見した。

テレホンカードが残っていたので、ポスターに出ている電話番号に電話をしてみた。これで3回目の電話だが、いつも幸運にも本人がいて、今回もすぐエスペラントで話すことができた。今回は本人といっても、SATの名簿には集会場となっている、日本風に言えば文化センターか公民館かみたいなどころであって、個人の名前は入っていなかった。電話を受けてくれたのは比較的若い男性で説明によると、今日はエスペラントの集まりは休みになっていたのだということでした。今日か明日の晩に会うことができないか聞いてみると、会いに来てくれることになった。都合の良い時間はと訊くと、夜は長いからいつでも良いと言う。少し

離れているが車で来れるということなので、夕食の終わる頃の8時半にレストランで会うことにした。

食事が終わる頃に彼は女友達と二人でやってきた。食後のコーヒで少し話をした。彼はエスペラントを始めて数カ月だということだが、なかなかきれいなエスペラントを上手に話す。彼女の方はあいさつと簡単な質問ぐらいで、彼が私達の話をもっと簡単にフランス語で説明していた。熱烈なSATの支持者となっていて、「ランティの本を読んでいるか?」、「安い本であるから是非読みなさい」と進めることしきりである。SATの会員も老人が多いことや、日本のエスペラントの状況など話す。彼はこれからはもっと宣伝をし、講習会なども積極的にやりたいと話した。

(見つけたポスター)

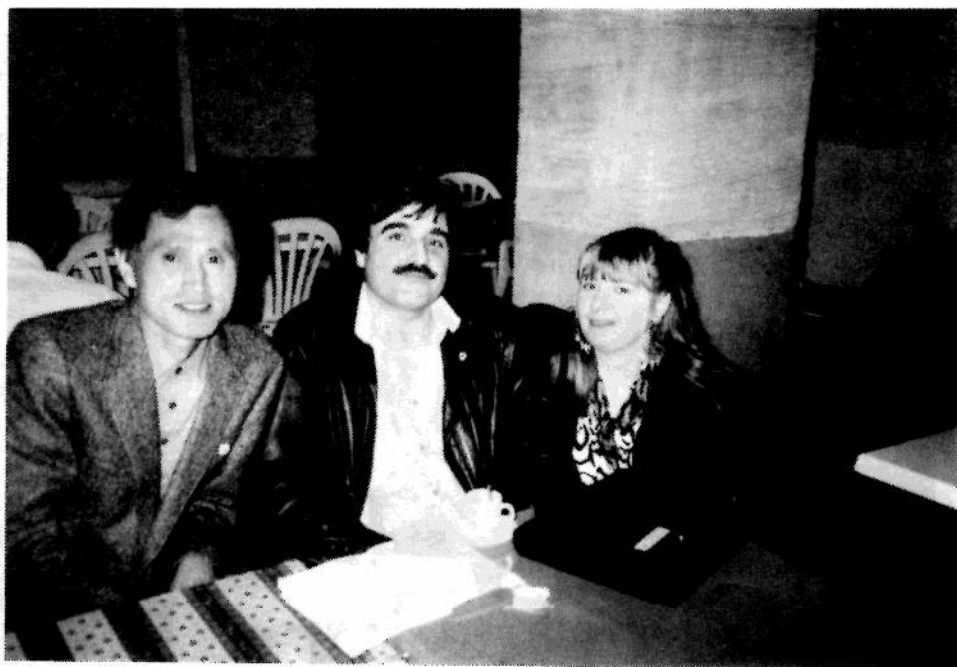




彼女は日本に興味があるらしく、床（畳）に座る生活のことなど、自分の頭では想像できないらしく、色々と訊いていた。

コーヒも飲み終わり、旅行団の他のメンバーが帰ることになり、レストランも閉店するのでここでの話は切り上げなければならなくなった。この日は我々のためにだけ、夜も開けていてくれたので、我々が帰ればもう開けておく必要がなかったのである。他のメンバーとは別れて、彼らと一緒に近くに住むエスペランティストのアパートに行くことになった。

彼は失業していて、彼女も仕事をしていないとのこと。生活については詳しい話を聞かなかったが、裕福でないことだけは確実である。彼の車は私の車よりも悪いぐらいで、なかなかのポンコツ車である。およそ2kmも走らないところで、歩道に乗り上げ駐車した。ヨーロッパでは古い通りには元々駐車スペースがないので歩道に乗り上げたり、また車道にはびっしりと駐車しているところがある。古い建物を上がって3階が目的地、建物の入り口から連絡していたのでおばあちゃんが迎えに出てくれていた。



（食事をしたレストランで、彼は女友達と二人でやってきた。）

着いたのは9時半を過ぎていたが歓迎してくれた。5人で色々と話したが、旦那さんの方はエスペラントは分からない、またおばあちゃんの方もそんなにベラベラと話せるわけではなく、お互いにゆっくりと話ができたので、都合が良かった。旦那さんはイタリア出身だとかで、イタリアのお祭りの話とか、エスペラントのこと、日本人の仕事の仕方とかの話が出た。休暇やリゾート地の見学などの話のとき、「あなたは仕事と休暇とどちらが大事と考えているのか」と言われて、「もちろん仕事ですよ」とは答えずに、「多くの日本人はあまり長く休んでいると、今度出勤した時、自分のポストが無くなると思っている」、それで「長期休暇は難しい」のだと説明して、「もちろん私は休暇の方が大事」と答えた。

前田先生のこと話が話の中に出てきて、このおばあちゃんは前田先生がフランスを旅行したときに会った人で、今でもときどき手紙を出しているということで、とても懐かしがっていた。深夜になったので、帰ることにしたが、お別れの時に観光案内のビデオを1巻プレゼントしてくれた。本当にうれしい夜で、貴重な訪問であった。



(前田先生に会ったことのあるというおばあちゃんと旦那さん、そして若い2人)



エスペラントで『大きな池』はどう訳しますか  
「大きな」は *granda*、「池」は *lageto*。  
だから答は *granda lageto*。

ところが、*lago* (湖) という字に『小さい』を  
意味する接頭辞の「*e t*」がついて『小さい湖  
すなわち池』と言うわけです。

すると『大きな池』とは、「大きい小さい湖」  
となります。大小プラスマイナスして唯の *lago*  
か。それも日本人にはおかしい。

こんな記事をラ・モヴァードに林さんが載せま

した。

相川さんが、日本語とエスペラントとは一語が  
一語に当たると決まらぬから、「池」を「*e t*」  
つきの *lageto* を使うとすれば、大きい *lageto*  
なんてあり得ない。どうしても言いたいならば  
*lageto larga je 500 metroj* か、*lago ne tre*  
*granda* とか言えば良い、と述べられた。

辰巳さんは、「*e t*」と「*eg*」とは特別な接  
尾辞で、これがつくとき別の意味になること有り  
だから *lageto* は大小に拘わらず「池」。

『大きな池』を *granda lageto* と書くことに  
相川さんは×、辰巳さんは○。

では貴方は？

さて、「*VERDA MONTETO*」は「緑  
の丘」。では『大きな丘』は？

El ege malnova libro:

**"Miru Pensu Ridu" (1950)**

ずい分昔の本から、今に通じるお笑い

"Mia fianĉo admiras ĉion mian; Mian figuron,  
miajn okulojn, mian hararon, mian voĉon, miajn vestojn."

"Kaj kion lian admiras vi?"

"Lian eminentan guston."



〔パスポート・セルボ〕

名簿を持参して、エスペラントを少し話せたら、ただで泊まらせてあげます

LA LISTO DE GASTIGANTOJ DE TEJO

# LA LISTO DE GASTIGANTOJ DE TEJO

# PASPORTA

# SERVO

1995



Tu el listo apartenas al:

Maeda Yonemi, Japanio

Martin  
Burkert

少し話がよすぎるようですが、ほんとうにある話。UEA青年部のバスポルタ・セルボの活動です。

名簿というのは、バスポルタ・セルボが発行した 宿泊させてくれる人の住所録で今年度は、世界71か国、812人の住所・氏名・電話などと、それに宿泊条件が付き記されています。

名簿はJ E Iで、1800円で売ってくれます。その名簿の表紙の下のほうに、

Tiu ci listo apartenas al:

とあって、の中に自分の名前を書けば  
それで有効となるのです。

宿泊条件はいろいろありまして、勿論一流ホテルというわけにはいきませんが、エスぺラント同志特有の人なつこさで、家庭的な雰囲気を経験できるのが特長です。

予約なしでも泊めるといふ人もありますが、たいていは手紙か電話での予約を望んでいます。

また、何人まで泊まれるか、何日間滞在できるかも、付記されています。2 G、3 Tというのは、2人まで、3日間泊まれるという略号。

食事は自分で手配してください。泊めてくれる人にたよる場合は、予め、食費など相談してください。

寝袋をもってきてほしいという人、週末や夏のUKの期間は留守という人などなどありまして、宿泊条件を予めよく研究しておく必要があります。

以下、宿泊条件の実例：

フランス・パリ

ビエール、49才 男、Anoncu vin plurajn tagojn antaŭe. Atentu: mi ĝenerale NE ĉeestas dum semajnfino, nek dum someraj kongresoj.

アラン、50才 男、nepre nefumantoj.

ストラスブール

ジャクリーナ 45才 夫人、Mi senkompatate ĵetas en paperkorbon ĉiun leteron petantan korespondadon aŭ laborpostenon.

ドイツ・ハイデルベルグ

トマス・クレマン（よしえさんの長男 26才 医学生）

2G.2T. Dormado surplanke, laŭeble kunportu dormsakon. Ofte forestas dum studentaj ferioj. ...Mi loĝas en unuĉambra loĝejo. Mia loĝejo troviĝas ĉ. 6 km okcidente de Heidelberg.

1996 (平成8年) 3月28日から

# エアメールの料金が大幅値下げ!

- 航空書状の料金が、平均25%も値下げになりました。
- 重量区分の簡素化で、より便利になりました。
- 密封できるグリーティングカードの料金が、新たに設定されました。

## ■航空通常郵便料金

種類		重量	地帯		
			第1地帯 アジア、グアム マーシャル ミッドウェイほか	第2地帯 北アメリカ 中央アメリカ オセアニア 中近東 ヨーロッパ	第3地帯 アフリカ 南アメリカ
書 状	定形郵便物	25gまで	90円	110円	130円
		50gまで	160円	190円	230円
	定形外郵便物	50gまで	220円	260円	300円
		100gまで	330円	400円	480円
		250gまで	510円	670円	860円
		500gまで	780円	1,090円	1,490円
		1kgまで	1,450円	2,060円	2,850円
2kgまで	2,150円	3,410円	4,990円		
印 刷 物	20gまで	70円	80円	90円	
	25gまで	90円	110円	130円	
	50gまで	120円	150円	170円	
	50gを超え1kgまで 50gごとに	70円増	90円増	120円増	
	1kgを超え3kgまで 250gごとに	175円増	225円増	300円増	
	3kgを超え5kgまで 500gごとに	350円増	450円増	600円増	
グリーティングカード	25gまで	90円	110円	130円	
特別郵袋 印刷物	5kgまで	3,800円	5,000円	6,800円	
	5kgを超え30kgまで 1kgごとに	600円増	800円増	1,100円増	
小形包装物	50gまで	120円	150円	170円	
	50gを超え1kgまで 50gごとに	70円増	90円増	120円増	
	1kgを超え2kgまで 250gごとに	175円増	225円増	300円増	

※定形郵便物とは、長さが14～23.5cm、幅が9～12cm、厚さが1cmまでの長方形のものです。

※書状とは、密封した郵便物です。

※印刷物とは、開封した郵便物で、定期刊行物、書籍、カタログ、DM、業務用書類、その他の一般印刷物を内容とするものです。

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirotsugu ( *dumonata* ) *N-ro 92*

## 山東省世界語協会(Shandong-a Esperanto-Asocio)の現況と私達

ご存じの通り、和歌山県と中国・山東省は友好関係にある。すでに北京での世界エスペラント大会や青島市でのアジア太平洋エスペラント大会を通じて両友好県内のエスペランティストの交流も深まってきている。昨夏、上海で開催の第1回アジアエスペラント大会に参加した私達4名は8月23日、大会プログラムの合間を縫ってシルクロードホテルの喫茶室で山東省より参加のエスペランティスト

ト(全参加者20名)7名と会合を持った。会合では出席者の自己紹介、土産やエスペラントの本の贈呈、歌や腹話術の公演もあり大変楽しいものでした。山東大学の S-ro Liu Xiaojun 教授は奥様の入院で欠席され、代わって娘さんが出席し、山東大学エスペラントクラブの活動報告をビデオに託されました。

以下、山東省世界語協会の現況を報告し、将来に向けての可能性を探ってみま



(第1回アジア大会、上海にて山東省のエスペランティストと一緒に)

した。

- ◎ 山東省世界語協会は山東省の民間エスペラント組織で、CELの指導を受けているが助成金は得ていない。  
名誉会長は Ding Funming 氏である。
- ◎ 会員数は約300名。会費支払者は150名で、会費は年5元。
- ◎ 省レベルの会合は年2回で、出席者は約30名。地方都市の例会はザメンホフ祭等を含め年15回。
- ◎ 例会の出席は個人の自由である。多忙か会費を支払えないことが欠席の理由である。現在海外文通のできる能力のある人は20名強である。
- ◎ 機関誌は年4回発行。誌名は Verda Stelo Super Taishan (泰山緑星)。エスペラント50%、中国語50%。  
1回の出版コストは1500元。
- ◎ 初級講座は年4回実施。講座の指導能力のあるエスペランティストは4名。1回の受講生は約60名(大半は男性で、学生と若い労働者である。)終講まで残る人は約80%。利用能力のない人達はエスペラントから遠ざかる。

今回の会合で感じたことは、友好都市という格好の枠組みを利用したエスペランティストによる具体的交流は、両市民へのPRや、エスペラント運動の拡大に寄与できるのではないかということとし

た。山東省の同志もきっと同じ思いであったと考えます。

具体的には、両グループ間同志の文通、両機関誌への投稿、ザメンホフ祭や大会での弁論・朗読などの賞品に両省県の土産物を提供し合う、友好都市間の姉妹校へのエスペラント同好会やクラブの創設に努力すること、エスペラント教授法の交換、相互訪問による交流等をあげている。しかし、相互訪問は山東省側としては金銭面で不可能とのこと。従って和歌山側からの訪問が大いに期待されている

現在関西国際空港から青島までの直行便の安売り航空券は往復3万5000円程度で入手できる。従って将来、山東省でホームステイができるようになれば、片道2時間程度で気軽に訪問できる。

私は数年のうちに、和歌山のエスペランティストや協力者を連れ、山東省各地のエスペラント会を訪ねたいと夢見ている。観光しながら各地でエスペラントの人形劇や腹話術を披露し交流を深めたいと考えている。

以上、全体として具体的交流には、参加できる人の数や資金面等相当の制約がある。しかし姉妹・友好都市間の交流として、私達が「エスペラントで何ができるか」を考える時期に来ているのではなかろうか。

第1回アジア大会の上海で、社団法人和歌山県鍼灸マッサージ指圧師連合会理



事の宮本敏企さんが「山東省の業友へのメッセージ」をエス文にして山東省のエスペランティストに手渡した。昨年末、山東省の鍼灸協会より宮本さんにエス文で、「同業者の技術向上と友好のため交流を深めたい」との返書が届いた。

私も退職後、パソコンを勉強し、インターネットを利用して、友好都市の市民の顔が見える記事をニュース和歌山等に提供していきたいと思っている。

(江川治邦)

\*\*\*\*\*

## 宮本敏企さん腹話術でエスペラントを宣伝

\*\*\*\*\*

和歌山県腹話術協会（会長：坂口全彦氏－和歌山市教育長）が主催する第16回腹話術発表会が1月19日に和歌山県民文化会館小ホールで開かれ、同協会副会長の宮本敏企さんが、「中国語・エスペラント語・紀州弁」と題して、約500名の観客を大いに楽しませた。エスペラントとはどんな言葉かを彼らしいコミカルな話術で紹介し、参加者を魅了した。

司会者はエスペラントにも触れ、彼が上海での第1回アジアエスペラント大会でエスペラントの腹話術を公演したこと、1999年にベトナムで開催予定の第2回アジアエスペラント大会にも出演すべく練習中であることも紹介されるなど、和歌山市民へのPRに大いに役立ちました。彼と同じエスペラント通信講座の受講生もかけつけて声援を送りました。

(江川治邦)

## インターネットとエスペラント

ウィンドウズ96が発売されたとき、パソコンを持っていない人まで並んで買っているニュースが出たが、最近はインターネットのブームである。テレビの特集では、『インターネットは世界を変える。』『大企業と個人企業もビジネスでは対等になる。』『大国も小国も同じ画面の大きさで情報を発信できる。』等々と、情報革命を決定づけたものとして大きく評価している。エスペラント団体、また各地のエスペランティスト達もインターネットを活用して、エスペラントの普及や相互の通信に利用している。既にホームページも多く出来ている。世界と直結するインターネットでエスペラントを使う。今年は是非ともこれを実現したいものだ。 FH

1996年12月 ザメンホフ祭報告

Ĵaŭda Rondo

昨年12月21日、和歌山緑丘会でザメンホフ祭を催しました。前田先生はお体の都合で欠席されましたが、大阪から奥村林蔵先生が来て下さいました。江川さんが荊（ちん）さんと宮本さんを連れて来て下さり、総勢13名の賑やかなザメンホフ祭となりました。

荊さんは、中国から和歌山医科大学へ留学して来られた素敵な美人で、宮本さんは和歌山腹話術協会の副会長をしておられる方です。可愛い人形を使ってエスペラント落語など演じて下さいました。

福本さんはベトナム旅行の写真を見せながら、おみやげ話をして下さり、あれこれ珍しい土産物を頂きました。

私たち木曜会は、“La plej granda rakonto en la mondo”を紙芝居で演じました。（Ni havis malsukceson iomete, sed ni tradukis Esperanton per si mem diligente.）

その後、木曜会員の用意した面白いゲームがいくつかあり、賞品も出て、とても楽しく時のたつのも忘れる程でした。

奥村先生はご高齢にもかかわらず、遠くからお一人で来て下さり、本当にありがとうございました。中国の荊さん、腹話術の宮本さんも来て下さって本当に良かったです。来年もどうぞ来て下さいますように。今年来られなかった方々も、又、まだ一度も参加されたことのない方も来年はぜひ来て下さい。お待ちしております。（木曜会一同）



## リトヴィアからの便り

奥村林蔵

『エスペラント・オジサン』として外国の子供たちとの文通を続けている奥村先生からポーランドの17歳の女の子の手紙が送られてきました。N-r o. 90に載せたリトヴィアの女の子からの手紙の記事を相手に送ったところ『これ、なんで載ったの?』とおどろいた手紙が来たとのこと。たとえ小さな機関誌であっても、自分の書いたものが活字になって記事として載るなんてなかなか無いことで、確かにこれは相手への刺激になることです。

手紙を公表するときは、内容にもよるでしょうし、相手にもよるでしょうが、やはり相手の承諾をとる必要があることを思い起こしながら、今回の手紙をタイプしました。というのは、以前に手紙を載せたことで文通相手に抗議されてその後文通が続かなかった事例があったのを思い出したからです。今回は奥村先生が『VMに載せるので何か書いて送れ』と書いた手紙の返事なので、相手も記事になることを知っていますので問題なし。さて、文法の誤りは幾つくらいあるのでしょうか? (福本)

Wadowice 2. IV. 1996

Kara "Verda Monteto"!

Mi nomiĝas Dorota Rejman, kaj mi havas 17 jarojn. Mi loĝas en Eŭropo en Polujo kun gepatroj. Mi frekventas al dua klaso de Teknikumo. Mi komencis lerni Esperanton en 1991 jaro. Pri Esperanto mi sciigis kun junularo programo "5-10-15". En 1992 jaro skribis al mi mia unua leter-amiko. Estis tio instruisto kun Japanujo -- Sinjoro Okumura Rinzo.

Nia korespondado daŭras eĉ al hodiaŭ. Mi havis ankoraŭ kelkaj aliajn amikojn-korespondado, sed konado malrapide finis. Krom Esperanto mi lernas ankaŭ germana lingvo.

Mia ŝato-okupo tio: interesaj libroj, muziko kaj korbo pilko.

Mi volus kore salutas al vi "Verda Monteto".

Dorota Rejman

## ベトナム訪問記 (その1)

1996. 12 福本博次

1996年12月5日から14日の日程でベトナムを訪問したので簡単に報告したい。ベトナムエスぺラント協会（ベトナム平和擁護エスぺラント協会より名称変更された、以下VEAと書く）の40周年記念大会に招待された熊木秀夫（千葉市）さんの呼びかけにより、同行することになったが、ほかに参加者がなかったので二人だけの訪問となった。

5日ホーチミンのタンソンニャト飛行場には、ニエムさん他数名が迎えに来てくれ、そのまま自動車でホテルに向かった。やはり南の国である、少し暑くて車ではクーラーを入れてくれた。通りにはバイク、自転車そして自動車が密集して走っている。ここではとても運転できないなどと思いながら、活気溢れる町の雰囲気を楽しむ。

ホテルはこちらの希望もあり1泊25ドルのツインの部屋である。クーラー、冷蔵庫、テレビ、バス・トイレ付きで十分良い部屋である。ここは以前誰かの邸宅であったのを最近ホテルにしたようであった。

その夜はホテルから歩いて数百メートルのところにあるニエムさんの家で歓迎会を開いてくれた。ホーチミンのエスぺラント会の主要メンバーとニエムさんの奥さんな（ホーチミン市での歓迎会で）



ど全員で8名が参加していた。(この中には上海の第1回アジア大会に参加されていた、V E A副会長の S-ino Le Tuyet Thanh や 中央委員の S-ro Tran Quan Ngoc もいた。初めて会う人ばかりなのと、ベトナム名に馴染みがないので名前がわからない。紙に書いてもらい、名前の意味や、対応する漢字などを教えてもらい、少し顔と名前を覚える。(S-ro Tran Quan Ngoc さんは、漢字で書けば「陳君玉」とのことである。)

熊木さんの持参していた日本酒で乾杯、鳥や豚などの臓物や肉の入った栄養満点の料理等を食べる。にわとりの足は柔らかく、小さな骨がある。豚の脳は絹こし豆腐よりも柔らかく、淡泊な味である。お酒も入り和気藹々と談笑する。二人が持っていったタイプライターのうち1台とエスペラントの本などのおみやげを渡す。私も持参のアルバムなどをみてもらい、楽しい歓迎会であった。

後で初心者若い女性3名が遅れて来てくれたので、彼女らに「D-ro Esperanto」の本をプレゼントする。エスペラントはまだ挨拶程度なのか、ほとんど話は分からない。

歓迎会の後、車で市内を巡り、夜のホーチミンを見学する。夜にも関わらず単車や自転車の洪水は続いている。本当かどうか知らないが、雨が降ろうと、夜であろうと(多分遅くても11時くらいまでと思うが)みんな単車などで走り回っているという。用事も無いのにひたすら市内を走り回るとのこと。信じられないが、通りの様子からは、これが本当のように思われる。都市の人達は、狭い家に沢山の家族が住んでいるので、冬でも暑いのに夏にはクーラーのない生活はどんなだろうか。通りを自転車でも走らせれば、風を切ってすこしは涼しく感じるというものだ。おまけに単車は大体が2人乗りで、家族4人も乗っているものもある。ここでは単車がマイカーである。

(ホーチミン市での歓迎会に出席してくれた人達) (続く)



# 1996 会計報告

(平成7年12月16日～平成8年12月15日)

収入の部	項 目	金 額	摘 要
	前年度繰越	24,399	
	会費	70,000	当日会費 10 名、会費 20 名
	会員割引	12,160	
	寄付	30,000	前田先生より
	預金利子	367	
	計	136,926 円	

支出の部	項 目	金 額	摘 要
	通信費	16,920	切手、はがき代
	印刷費	31,930	VM印刷代
	事務用品	4,999	封筒、紙やき代
	会議費	9,071	ザメンホフ祭菓子代
	計	63,250 円	

収支残高	項 目	金 額	摘 要
	収入計	136,926	
	支出計	63,250	
	収支残高	73,676 円	

(編集後記) 前号発行より約1年余り経過した。機関誌を出し続けるということは大変難しいことである。これからは出来るだけ定期的に発行できるようにしたいと思っている。機関誌とは本来会員の投稿により成り立っていくものであるが、なかなかそのようにはならない。原稿を書くというのは面倒で、これはやはり書くのが好きでなければできないことなのかもしれない。奥村先生の原稿も1年以上掲載せずに過ぎてしまい、大変申し訳なく思っている。ここでお詫び申し上げます。即時掲載の保証はありませんが、どなたでも結構ですから、原稿をお送りください。順次掲載します。今回より編集者名を変更して責任を感じるようにしました。福本

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirotsugu ( *dumonata* ) N-ro 93

## ★エスペラント★

### 気軽に会話してみませんか

エスペラントを学んで、「ああよかった!」と実感できるのは、何よりも会話ができて通じ合えることではないでしょうか。初級講座を終えた人であれば、あとは言葉への慣れと、単語の記憶数を増すだけで上達してゆける。そんな会合を月に1回、どこかの喫茶店で持ってみませんか。場所としては皆さんが集まりやすい、地理的条件の良い所で、できれば個室があって、ビデオや黒板が装備されている所がベターです。安価に利用できるそんな喫茶店があれば江川までお知らせ下さい。(喫茶店に固執しません、安価な会議室でも良い。)

最近初心者向けの *Mazi en Gondolando* や、近く発行される成人向け *Esperanto, pasporto al la tuta mondo* (ELNA 北米エスペラント連盟が企画作成。人種が異なる6人がカラフルなコスチュームで、アメリカ映画さながらの楽しさを日常会話と共に演出している。) など優れたビデオもあり、これらも利用できればと思っています。また友好都市、中国・済南市の山東大学エスペラントクラブからも、エスペラント活動を伝えるビデオも届いています。これも楽しい教材のひとつに加えられます。

ここ数年の世界大会は、1997年はオーストラリア(アデレード)、1998年はフランス(プロバンス地方)、1999年はドイツ(ベルリン)に決定されています。また1999年にはベトナムで第2回アジアエスペラント大会が開催されます。私は今後、できる限りこれらの大会に参加してゆきたいと考えています。言葉が通じ合える海外旅行は楽しさを倍加さすだけでなく、エスペランティストの同志愛がさらに深まることでしょう。

いかがですか。——月に1回の、そんな例会を持ってみませんか。(後日ご相談の上実行に移してゆきたいと考えますので、ご意見をお聞かせ下さい。)(江川治邦)



# LA MALGRANDA SORĈISTINO



Nia grupo nun studas  
la fabelon "LA MALGRANDA SORĈISTINO".

La tradukinto de la fabelo estas s-ino Yoshie kleemann,  
kiu estas amikino de nia gvidanto s-ro Maeda.

Ni tradukas ĝin en la japanan lingvon tre ĝoje, pro tio, ke la fabelo  
estas tre ĉarma rakonto. De nun ni publikigos tion sur la "VERDA MONTETO"  
iom post iom.

Ĵaŭda rondo

( 小さな魔女 )

## La Maronvendisto

栗屋さん

Estis vintro. Ĉirkaŭ la sorĉistina domo mugis neĝstormo kiu skuis la ŝutrojn. Al la Malgranda Sorĉistino tio estis tute egala. Ŝi sidis nun tagon post tago sur la benko antaŭ la kahela forno kaj varmigis sian dorson. Ŝiaj piedoj estis en dikaj feltpantofloj. De tempo al tempo ŝi klakis per la manoj — kaj ĉiufoje kiam ŝi klakis, unu el la brulŝtupoj, kuŝantaj en la kesto apud la forno, saltis mem en la fajrejon. Kiam ŝi foje havis apetiton ĝuste je rostitaj pomoj, tiam ŝi nur bezonis klaki per la fingroj. Jen kelkaj pomoj tuj rulis el la provizejo kaj saltetis en la rostujon.

冬のことでした。魔女の家の回りは吹雪がビュービューうなり、鐵戸をゆさぶりました。小さな魔女にもそれは分けへだてなく襲ってきました。彼女はタイルの暖炉の前のベンチに坐って今も背中を温める毎日でした。足には厚いフェルトのスリッパをはいていました。時々両手でパチンと鳴らすと、その度に暖炉のそばの箱の薪が一本びよんと飛んで暖炉の火の中へ自分で飛びこみました。焼きリンゴが丁度食べたくなった時は、ただ指をピチッと鳴らすだけでいいのです。リンゴがいくつか食べ物入れからすぐに転がり出てトースターの中へ飛び込むのでした。





Tio plaĉis al la korvo Abrakso.  
Li certigiĝis ĉiam denove: "Tiel oni  
vere bone eltenas la vinton!"

Sed la Malgranda Sorĉistino per-  
dis iom post iom ĉiun plezuron pri  
la senlabora vivo. Iun tagon ŝi di-  
ris malbonhumore: "Ĉu mi sidu la tu-  
tan vintron sur la fornbenko kaj  
varmigu mian dorson? Mi bezonas re-  
foje moviĝon kaj ankaŭ freŝan aeron  
ĉirkaŭ la nazo. Venu, ni elraĵdu!"

"Kio? kriis Abrakso ŝokita.  
"Kion vi pensas pri mi? Ĉu mi estas  
glacibirdo? Ne, tiu glacia malvarmo  
estas nenio por mi! Mil dankojn pro  
tiu invito! Ni prefere restu hejme  
en la varma ĉambro!"

Tiam la Malgranda Sorĉistino diris:  
"Nu bone, kiel vi volas! Laŭ mi vi  
povas resti hejme, mi do rajdos so-  
la. La malvarmon mi ne timas, mi ve-  
stos min sufiĉe varme."

La Malgranda Sorĉistino surmetis  
sep jupojn, ĉiuj unu sur la alian.  
Poste ŝi ĉirkaŭligis la grandan  
lanan kaptukon, glitis en la vintro  
botojn kaj surŝovis du parojn da  
gantoj. Tiel vestite, si saltis sur  
la balailon kaj fulmrapidis tra la  
kamentubo.

カラスのアブラクソは、これが気に入っ  
ていました。  
いつものことですが、また念を押すように  
言うのでした。「こうすりゃ冬も楽しく過  
ごせるね！」

でも小さな魔女にとって、こんな何もし  
ない毎日では、だんだん楽しみが無くなっ  
ていくのでした。ある日、不気げんそう  
に言いました。「冬中、こうしてベンチに  
坐って背中を温めてばかりいなきゃなら  
ないの？ また体を動かして鼻の回りの新し  
い空気を吸いたいわ。さあ、いらっしやい  
飛び出しましょう！」



「何だって？」とアブラクソは驚いて言  
いました。

「いやですよ、こんなひどい寒さは私には  
ろくなもんじゃありません、ごめんですよ  
そんなお誘いは！ 家において、こんな温か  
い部屋でじっとしてしましましょうよ！」



すると小さな魔女は、「そんならいいわ  
思うようになさい、あんたは家にいる方が  
良いよね。私一人でいくわ。こんな寒さ  
なんかこわくない、十分着ていくわ。」



小さな魔女はスカートを上へ上へと七枚  
まといました。それからウールのスカー  
フをぐるぐる巻きつけ、冬のブーツに足を  
突っ込み、手袋を二足はめました。この  
ように着こんで、帯に飛び乗り、煙突から  
さあーと飛び出しました。



(次号へ続く)

6日朝からは、ワゴン車1台、11名でメコンデルタへ遠足に行く。この日の参加者の内5名はエスペラントをほとんど話さない。3時間程走って、車に酔いかけて気分が悪くなった頃に、ようやく目的地に着いた。しばらく休んで舟に乗り換える。南部ベトナムは広大なメコンデルタで、川と言うよりは流れのある広い湖のようである大きな河と運河、小さな川が繋がっている。

これらを小船で巡り、島にある小さな村の家の側を通過して、アヒルの群を眺めるゆったりとした船旅はまた格別である。子供達は舟で通学しているのか、ちょうどある島の船着き場で沢山の子供達の乗った舟を見かけた。乗合バスではなく、乗合舟である。快適に走る船上では風で暑さも和らいで感じる。川に面している土地は場所によって、水で浸食されて崩れていっている。このため竹の杭を立てたり、マングローブのような木を植えて、水の浸食を防いでいる。

しかし後から考えると、救命具も付けていなかったのが、転覆すればあの世行きだ。ほとんど泳げない上に、陸地まで数百メートルある広い河も通る。ここでは車は余り

(メコンデルタへの遠足に出かける前、ニエムさんの家の前で)



(メコンデルタの舟旅の様子。先頭にいるのはタンさん。よく冗談を言う。)



役に立たない。代わりに舟が人々の交通機関になっている。全ての川に橋を架けるのは不可能だ。

島のレストランで昼食をとる。昼食中、熊木さんが貧血で倒れる。脳溢血かと思い、とても心配したが、貧血と分かって安心した。朝から何も食べていなかったのと、少々の車酔い、その上にレストランでの強い酒を少し飲んだのが悪かったのだろう。しかし、医者が2人も参加していたので、血圧計も持参していて、手当してくれ大変助かった。夜、市内に帰ってから、心電図も計って、漢方薬ももらう。

ホテルに帰ってから二人で近くに食べに出る。選んだ所が食堂でなく、飲み屋であったので、ご飯がない。英語も話さない。メニューを見てもさっぱり分からない。仕方なく、とりあえずビールをたのむ。隣の席の人が焼き肉のようなのを食べていたので、指をさして同じ物を注文する。道路に向かって開け放しのところで、靴磨きの子供が来たので磨いてもらう。2000ドン(約20円)払う。熊木さんが次の子に5000ドン払ったので、前の子が不満を言った。他にも物売りの人が沢山入ってきて進めにくる。南京豆を買った。店では彼らを無理に追い払おうとはしない。足が曲がっていて、腕で歩く子が店先にいる。客に食べ物をもたらしているようだ。熊木さんが物売りから買ったお菓子をあげる。この店の二階は特別室か、アオザイを着た女性が降りてくる。多分お酒の相手をする女連だろう。後で s-ro Tan に聞いてみたが、行ったことがないのでどんなところか知らないとの返事だった。結局余り腹が膨れず帰ることにした。

(続く)

# あるエスペランチストの回想

(初めて迎えた Eksterlandano )

田中正美

私が Verda Montelo にエスペラント漫筆と題して雑文を発表したのは、20年も前のことで、これを読んだ人は、今では極めて少ないだろう。それで、多少の重複や思い違いなどは意にせず書いてみようと同稿用紙に向かってみた。

何度も思うことは、和歌山県下の運動を進めてきた古いエスペランチストのことである。このことは是非書き残しておきたいし、皆んなに知ってもらいたい。苦難な時代、私達の先輩がエスペラントを学び、この運動を進めてきたが、恐らくどのエスペランチストも新しい時代を夢見ていたに違いない。そしてその目標とするところは、世界平和、人類愛であったことは疑う余地はない。私利私欲を捨て、純粋な気持ちで、この運動を押し進めてきたことに私は感謝せずにはおれない。

[昭和10年～11年]

高野口町の横垣孝一君は私と同年代の24才、偶然の機会から交際が始まった。横垣君は当時、大阪美術学校の学生であった。前年の文展に見事入選を遂げ、天才画家として郷土の人々から将来を期待されていた。地方新聞にも報道されて、一躍人気者になっていた。

彼はまた、絵の勉強の外にエスペラントを独習していた。

私は当時、妙寺町(現かつらぎ町)の親戚の家に寄寓し、橋本町にあった会社(現幸福銀行)に通勤していた。高野口町は丁度中間の駅だったから、私は途中下車してしばしば横垣君を訪ねて親睦を深めていた。

そうしたある日、岸和田市の西田亮哉さんから横垣君のところに連絡があり、外国人エスペランチストをバトンタッチしたいから、是非迎えに来るようにと言ってきた。

私達は翌日に、早速岸和田市に向かった。駅前で西田さんの家を訊ねると、「西田さんの家は西方寺というお寺で、この大通りを行くといい」と教わって西の方向へ歩いて行った。両側には商店が建ち並び大いに賑わった街並みであった。

途上、商店街の一角に5～6人の集団があった。見ると一人ののっぽの外国人が見えた。私達はあれが私達の目指す人ではないかと思い近づいてみた。

しゃべっている言葉は一向に解らないが、英語ではないことは確かだ。ひょっとしたら私達が尋ねている人かも知れない。使っている言葉、あれがエスペラントではないだろうか？

横垣君も私もエスペラントは2～3年前から勉強はしていたが、現在のように講習会や勉強会などは地方には全く見当たらない時代だったので、二人共独学で勉強するより外に手だては無かった。それで生のエスペラントを聞いたりしゃべったりするチャンス等は全く無かった。

西田さんは不思議な顔をして突っ立っている私達を見つけて近づいてきた。そこに居たグループは岸和田のエスペランチスト達であった。西田さんは一同を連れてお寺に戻り、改めて自己紹介をした。

J e n F e d o r Ć a k !

M i e s t a s J o k o g a k i .

M i e s t a s T a n a k a .

横垣も私もかろうじてこれだけを言った。初めて口にするエスペラントによる自己紹介、しかも外国のエスペランチストの前でのこの時の私の緊張は、言い知れぬ不安、胸の高鳴り、今でもハッキリ思い起こすことがある。

かくしてFedor Ćakは大きなトランク1個を提げて高野口へやってきた。1936年(昭和11年)4月上旬であった。折から駅の近くにある高野口公園は桜が満開で花見の人々でごった返していた。公園の前を歩いて少し下ると横垣君の店があり、その裏に別宅があった。ここにFedor Ćakを泊める手筈になった。横垣の家は呉服屋で、表の方には店員さんも大勢いた。その時紹介されたのはご両親始め、横垣の妹さん、店の人達、お手伝いさん等であった。

私どもはFedor Ćakが過ごす部屋に案内された。私もしばらくここで一緒に寝泊まりする事になった。

夕食を済ました後、改めて自己紹介をした。

彼は横垣君に、「お前はこれから『Horizontal』と呼ぶことにする。田中、お前は名前がマサミだから『Masu-cjo』と呼ぶぞ」と全く一方的に決めてしまった。この呼び名には私は大いに不服であった。なぜなら"Masu"というとなんかしら猥褻なものを感じさせるからだ。仕方がない。彼の独断をしばらく容認するしかない、と観念した。

私は横垣君と相談して彼を『デメ』と言うことにした。そのことを彼に告げると、彼はその意味は何だと聞いてきた。私は次のように説明した。「君の名前は Demetry Fedorĉak だから familia nomo をとって『デメ』と決めた。日本にある観賞用のデメキンに通じ、とても素敵だ。」と言っておいたが、解ったのか甚だ疑問であった。

咄嗟の思いつきで彼のニックネームを『デメ』さんと名付けたのは別に大した理由があったわけではないが、考えてみるとその名は的中しているように思えた。出目キンは持ち前の出目を突きだして水槽の中を泳ぐ姿は愛嬌があってユーモラスである。

しかし、彼はユーモアある話し方で私達のエスペラントを豊かにしてくれたが、また一方皮肉屋で、思ったことをズバリ言ってみたり、彼独特のパフォーマンスを公衆の前で演じ、私共を少々手こずらしたことも再々だった。

この事は順次書いていくつもりである。しかし、発表する上で、書いても許されること、書いてはならないこともあって、すべて真実だからといって書いては倫理に反することもあるということを最近知った。次は彼の経歴を書くことにしよう。(daúrigota)

カ 菱 女 ズ ( himacubusi )

どこかで読みました。 エスペラントの講習の  
1時間授業のあと、

『もう、貴方はエスペラントの単語を1000  
以上知っているでしょう』

ハテ？ そんなこと出来る？ あり得る？

(その答。 unu du tri kvar kvin ...  
naŭcent-naŭdek-naŭ mil.)

恐れ入りました。これなら千でも万でも。

かどえるのに、1から始めるのと、0から始め  
るのと、あります。

高層ビルで、1階2階3階 ( unu etaĝo, dua  
etaĝo, tria etaĝo ) と数える地域と、0階  
1階2階 ( ter-etaĝo, unua etaĝo, dua etaĝo  
 ) と数える地域とがあるようです。上着売り場  
と思ってエレベーターを出たら下着売り場だっ  
た、なんてことにならないようご用心。

日本人の年令は1始まりは数え年、0始まりは  
満年令ですね。

世紀 ( jar-cento ) 数えは1始まり。0世紀は  
無し。 0~99 が1世紀、1900~1999 が20  
世紀。2000年になったら21世紀。

時間 (時刻) を示すのにもまた、ややこしい。  
私達が『1時15分』と言う時は、0時→1時  
→15分のこと。

でも国によっては、0→1は第一時、1→2は  
第二時、その第二時の15分の所なので、『2  
時15分』と言うことになります。さあ、汽車  
に飛行機に乗り遅れぬこと。エス・クンシード  
に遅刻せぬこと。

日本には物事を数えるのに、1個2個とか1枚  
2枚とか単位を必ず付けます。何の単位は何と  
覚えるのも大変。その上に、その単位の読み方  
がまたややこしい。(1始まりなので、数え違  
いの心配は無し)

k r a j o n o (鉛筆)

1本	1 ッポン	
2本		2 ホン
3本		3 ポン
4本		4 ホン
5本		5 ホン
6本	6 ッポン	
7本		7 ホン
8本		8 ホン
9本		9 ホン
10本	10 ッポン	

kato kaj hundo kaj aliaj について、上にな  
らってどう変わるか調べて見て下さい。

1匹 2匹 3匹 4匹 . . . 10匹。

(奥村林蔵) 1996-04-15

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirotsugu (dumonata) N-ro 94

## 図書館にエスペラントの本を！！

和歌山県立図書館移転直後は、書棚にエスペラント関係の本が数冊しか見当らなかった。しかし、その後文法・語法や外国文学・その他諸文学の書棚に若干のエスペラントの本が現われ、辞書の書棚には「国際語・エスペラント」なる見出板が置かれたのを見つけて、講習書や辞書、文学書など数冊を寄贈した。バブル崩壊後、各地方都市の図書館への予算が減少傾向にあるためか、図書の寄贈は歓迎される。私の如きわずか10冊たらずの寄贈でも、館長名で感謝状が贈られる有様である。しかし、書棚に寄贈本が並ぶまで1年以上もかかっている。特に、横文字の書籍は分類上時間がかかるようだ。

昨年ザメンホフ祭で、私は上記に触れた話をしたためか、早速奥村林蔵さん

より多数の本が私宅に送られてきた。昨秋は殿井一郎さんよりPIVなど貴重な御本を数十冊いただいた。これらの一部を図書館に寄贈すると共に、残余は勝手ながら私の通信講座終了者に配布した。

時々図書館をのぞいてみると、講習書など誰かに読まれた形跡を感じる。和歌山市民の誰かが、ふとしたことで国際共通語エスペラントなる本を図書館で手に取って見たことが、エスペラントを学ぶ契機になることを想像してみたい。

いずれにしても、このような機会を提供してゆくことも、エスペラントとのご縁を得た私達の義務かもしれない。今後は、市民図書館にも同様のアプローチをしてゆきたいと思う。特に辞書や講習書について、会員の皆さんからのご協力を期待する。(江川治邦)

7日は、朝から郊外の遊園地に行った後、エスペラントの支持者であるレンガ工場の持ち主のお宅を訪問する。乗用車2台に分乗して、参加者は全部で8人である。郊外へ向かう道路はかなり広いが、車が多くて運転は危険そのもの、運転手は大変な仕事である。追い越し、急な割り込み、その上単車も多い。信号で止まったことを憶えていないので、市内中心部を出てからは、信号が少なかったのかもしれない。これでは道路を横切っただけの通行は難しい。

訪れた遊園地は、最近できたところで、乗り物もあり、小動物や鳥も飼っている。入場するにはお金が要る。ここには大きなお釈迦様の像も立ててあったりして、仏教の国であることを知らされたが、公園の中なので何か変な感じであった。結婚式を終わったカップルが、カメラマンに記念写真を撮ってもらっている。立派なウエディングドレスなので目立っている。また、小学校の子供達が遠足にきていた。この子供達は栄養も行き届いていて、比較的恵まれている家庭の子のようだ。一方には靴磨きをしたり、路上で物売りをしている子供達もいる。まだまだ福祉制度は整っていないようである。





レンガ工場は、遊園地からさらに少し走って、幹線道路から横に入った所にあった。横道はまだ舗装がされておらず、大きな穴ぼこができていて、ひどい道路である。雨の時はとても通れそうにない。

まず工場の持ち主の家を訪問した。写真のとおり、なかなか大きな家である。この家の後ろには、親族の家が2軒あり、一族がまとまっている。

おばあさんのキム・アンさんは上海大会にも参加していて、写したビデオを見て、昼食をご馳走になった。午後はレンガ工場を2カ所見学する。工場では建築用のレンガ、屋根瓦、耐火煉瓦などを製造していた。手作業も多く、成形後すぐに不良品で元に戻しているものも多く、製品の質はどの程度なのかは分からなかった。今後家の建築は増え、レンガの需要はますます大きくなると思われる。工場では設備の拡大を進めていた。

資金投資の話も出て、すすめられたが、工場の増設費用はやはり数千万円は必要とのことで、私達の取り組める範囲ではない。しかし、ベトナムはいま建設ラッシュが続いていて、経済成長率も非常に高いので、投資効果は大きいのではないだろうか。また、資金があれば土地に投資するのも良いかもしれない。

帰りには、市内に戻ってから家具の販売店を訪ねる。主にテーブルやイスであり、中国風で、細かく彫刻の入れられた立派なものである。

夜にタンさんが訪ねて来てくれた。彼は冗談も言うなかなか楽しい人だ。35歳程だが、もうすぐ結婚するそうである。ニエムさんも入れて4人で夕食を食べに行く。タンさんにはエスペラントのシールをあげ、単車に張り付けてもらう。良い宣伝になるのではと思う。ヘルメットに「ESPERANTO」と書いている。熱心なエスペランチストである。

(続く)



# あるエスペランチストの回想

No. 2

( Pri Fedor ĉak )

田中正美

1991年4月号の“El Popola Ĉinio”を読んだときの私の驚きは今に忘れない。

私達の前から風のように消えて行った Fedor ĉak、その後の消息は何一つ掴めなかった彼のことが書いてある。そこには、日本に来るまでのことが書かれてはいたが、彼から直接聞いた事柄以外に私の知らないことも多く報告されていた。筆者は Chen Yuan (陳原)さん、当時は中国科学院の所長で言語学者である。

“homoj neforgeseblaj” (忘れ得ぬ人々)には毎号1人ずつ紹介しているが、何れも Chen Yuan さんとの交友関係のあった人々である。その第1号が Fedor ĉak で、他には日本人としては、私の友人の宮本正男、ベトナム戦争に反対し首相官邸前で悲壮な焼身自殺を遂げた由比忠之進、UEAセンターに勤めていた永田明子、その外 El pin (Usan)、ジャーナリストで探検家の Tibor Sekely 氏など数名が紹介されていた。

## (Fedor ĉak の経歴)

Chen Yuanさんの記事を参考にしながら、私が彼から直接聞いたことを報告しよう。彼は18歳のとき故郷ハンガリーを後にして、世界放浪の旅に出た。ヨーロッパ各地を廻り、働きながら遍歴を続けた。彼自身「俺は生まれながらの “kosmopolito”」と言っていた言葉通り、それを実践していたのであろう。それまで一度も故郷の土を踏んだことはないも言っていた。ソヴィエトに来たときは、ちょうど第1次5カ年計画に入ったところだった。これはゴーリキーが提唱したもので、Fedor ĉak は専門の電気技師として、これに参加している。

1933年にソヴィエトから上海に行き、その後1934年の夏に広東に着く。彼は広東の pleba domo に宿をとった。(pleba domo は慈善事業で建てたもので、1泊は10~20セントで、貧困者の宿泊所である。)広東エスペラント会は Fedor ĉak を講師として講習会を開催した。前記の Chen Yuan さんは当時中学生だったが、この講習会へ通い、会話の練習をやったが、時々分からない単語が出て辞典のお世話になったと書いている。

また、「Fedor ĉak は流暢にエスペラントを話し、初対面から外国人と思わなかった。」と Chen Yuan さんは書いている。そして、「中国に対して批判して、人口が多いこと、Kontraŭ koncipi が必要なこと、そのために器具が必要だ。例えば kaŭcuka。辞典を引いて理解した」と。

中国の国内を見て廻ったことは、Fedor êak がしばしば中国の美しい湖や溪谷などの話をしていて想像できる。私にも、「一生の中一回は中国へ行け」と言っていた。

さて、Fedor êak は何時広東を出て日本へやって来たのかは、はっきりしない。しかし、彼は高野口へ来るまで日本の各地を見て廻ったフシがある。ある時彼は、「松江の街には面白い所があった」と言うのである。「それは何だ?」と聞くと、「あそこには Bordelo があった」と言う。私はこんな単語は初耳だったから、密かに辞典を引いてみた。そこには Domo, kie la prostituitinoj akceptas la klientojn とあって納得した。大切な単語はすぐに忘れるのに、この言葉だけは今だに憶えている。

### ( 紀州の茶がゆと Fedor êak )

私達が彼に会ったときは、彼が32~33歳位だったと思われた。彼が言っていた通り、如何にも労働で鍛えたとされる体軀、腕っ節をしていた。私達が彼に『デメ』と付けたニックネームは正にそのものズバリで、彼は実際茶目で皮肉やであった。一つ屋根で過ごした1週間の中に私達が彼から教えられたことは、エスペラントの会話だけではなく、ヨーロッパ式の習慣、男女交際やその他も色々教えて貰った。

紀北地方では朝食は『かゆ』である。いわゆる『茶がゆ』は紀州の名物である。横垣の家も、朝は茶がゆであった。Fedor êak はこれを Japana kačo と行って食べ、Bongusta、Bongusta と行って、お替わりをしていた。

私は日曜以外は会社に出勤し、時間があれば帰途横垣の家へ行き、泊まってデメさんの相手をしていた。横垣は毎日デメさんを連れて、あちこち散歩や小旅行をしていた。

そうしたある日、横垣は「今日デメを連れて、和歌山の橋さんを訪問してきた」と言う。橋さんは県下では古くからのエスペランチストで、私は名前だけは知っていたが一度も会ったことはなかった。横垣にしてみたら、長く病床にある橋さんを訪ねて、珍客のデメを連れて慰問するつもりであったのであろう。

私は早速デメに、今日会った橋さんについての感想を聞いてみた。答えは実にシニカルなものだった。“li estas duone mortinta” デメにしたら恐らく元気な人を予想していたのではないだろうか。この言葉の前に、“domaĝe” という一言があったのに、私が聞き落としたのかも分からない。

ここで、橋さんの経歴などを一寸かいておこう。橋さんは海草中学を卒業後、野崎村役場、和歌山市役所に勤務、45歳からは小児麻痺のため終生病床にあった。エスペラントの詩を書いたり、近松ものをエスペラントに訳して、学会の機関誌に発表したことがある。(1903年~1976年)

当時、私が県下のエスペランチストを学会に照会して憶えているのは、和歌山市の橋さん、山の井某、田辺町の松葉勢太郎、新宮の榎本文太郎、高野山大学の栗山の各氏であった。

(daūrigota)

# LA MALGRANDA SORĈISTINO

小さな魔女

La Maronvendisto - 2 -



- ☆ 活字の部分は、木曜会の訳文です。
- ☆ 手書きの部分は、前田先生に御指導を戴いた訳文です。

Ekstere estis akra malvarmo!  
La arboj portis dikajn, blankajn  
mantelojn. Musko kaj ŝtonoj estis  
malaperintaj sub la neĝo. Tie kaj  
tie vojsignis sledspuroj kaj pied-  
signoj tra la arbaro.

La Malgranda Sorĉistino direktis  
la balailon al la proksima vilaĝo.  
La bienoj estis tute neĝkovritaj.  
La preĝeja turo portis neĝan ĉapon.  
El ĉiuj kamentuboj levigis fumo.  
Preterrajdante la Malgranda Sorĉi-  
stino aŭdis, kiel la kamparanoj kaj  
iliaj servistoj draŝis la grenon  
en la garbejoj: Rum pum pum, rum pum  
pum.

外は厳しい寒さでした。木々はぶ厚い雪の  
マントを着ていました。苔や石は雪の下に隠  
れていました。あちらこちらにソリの跡や森  
を通り抜けた人の足跡が道についていました。



小さな魔女は近くの村の方へ嚮を向けまし  
た。地面はすっかり雪におおわれていました。

教会の塔は雪の帽子をかぶっていました。  
どの煙突からも煙が上がっていました。

そばをとびながら ( そんがあをりま  
かすめて とびなばら、 )

小さな魔女は農民と彼らの下男たちが納屋で  
どんなにして穀物を打っているのかを聞きま  
した。ルンブンブン、ルンブンブン。

Sur la montetoj malantaŭ la vilaĝo svarmis infanoj, kiuĵ sledis. Ankaŭ skiantoj estis inter ili. La Malgranda Sorĉistino spektis, kiel ili konkure rapidegis malsupren. Iom poste alproksimiĝis neĝŝovilo sur la strato. Kelkan tempon ŝi sekvis ĝin; poste ŝi aliĝis al aro da kampkorvoj flugantaj al la urbo.

Mi volas iri en la urbon, ŝi pensis, por iom varmiĝi marŝante; ĉar in tertempe ŝi ege frostis malgraŭ la sep juĵoj kaj la du paroj da gantoj. La balailon ĉi foje ŝi ne bezonis kaŝi, ŝi metis ĝin sur la ŝultron. Nun ŝi aspektis kiel tute ordinara maljuna panjo, kiu iras por forigi neĝon. Neniu, kiu renkontis ŝin, pensis ion pri tio. Ĉiuj homoj rapidis kaj preterpasis ŝin kun kapoj duone kaŝitaj.

Tre volonte la Malgranda Sorĉistino refoje ĵetus rigardon en la montrofenestrojn de la vendejoj. Sed la vitroj estis plene kovritaj per glacifloroj. La urba puto estis glaciiginta, kaj de la gastejŝildoj pendis longaj glacipendaĵoj.

村の後ろの(むこう)丘の上で子どもたちがむらがってソリに乗って(そり遊びをして)いました。彼らのなかにはスキーをしている人たちもいました。小さな魔女は彼らが競争で滑り降りるのを見物していました。少したって道の上の雪シャベル(?) (道の上につけて 雪よけに) に近づきました。

しばらくの間、彼女はそれをたどっていきました。そのあと彼女は街に向かって飛んでいり野ガラスのむれに加わりました。

私(彼女)は少し温めるために街へ歩いて行きたいと思いました。なぜかという、七枚のスカートと二足の手袋を着けていたのにその間も大変に凍りつくように寒かったからです。(あれこれしている間に(本が)とてもこごえたからでした。)

今回は彼女は箒をかくす必要はありませんでした。彼女は箒をかづきました。

今(nun こうすると)本当に普通の年とったおかあちゃんが雪かきに行くように見えたのです。

出会った人は誰も何も(ion 何とも)思いませんでした。人々はみな頭を半分かくして通り過ぎました。

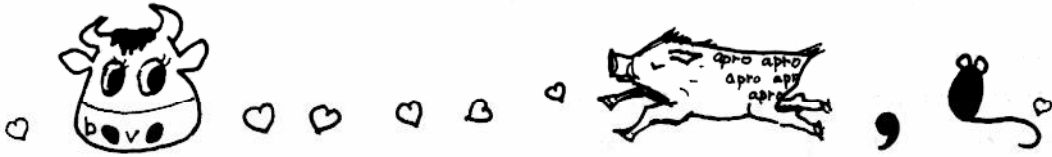


小さな魔女はまた店屋のショーウインドをとでも喜んで見ました。(店の陳列まごを またのぞきこみたくて

(tre volonte ⇒) しめたがなかつたのでした。)

けれどもガラスは一面氷の花でおおわれていました。街の井戸は凍っていて旅館の看板からは長いツララが垂れ下がっていました。

(次号へ続く)



## Jaro de Bovo

OKUMURA-Rinzo (Japanio)

En Japanio, estas stranga kutimo. Tio devenis el Ĉinio, antaŭ longa tempo. Kio ĝi estas?

Oni donas al la jaro, nomon de bestoj, kares-nomon, 12 bestoj, sinsekve, en ronda vico.

- 1-a estas rato.
- 2-a estas bovo.
- 3-a estas tigro.
- 4-a estas leporo.
- 5-a estas drako.
- 6-a estas serpento.
- 7-a estas ĉevalo.
- 8-a estas ŝafo.
- 9-a estas simio.
- 10-a estas koko.
- 11-a estas hundo.
- 12-a estas apro.

奥村林蔵先生より、ハンガリーの子供に送った手紙の写しが送られてきました。1月・2月号に載せるつもりが、遅れてしまいました。十二支については、日本では『ね（ねずみ）・うし・とら・う（うさぎ）・たつ・み（へび）・うま・ひつじ・さる・とり（にわとり）・いぬ・い（いのしし）』となっています。元々、中国から伝わったもので、年の数え方に分かりやすく動物の名前を当てたものです。何かの本で、『他の国では一部の動物が異なっている』と書いていたような気がして、今回図書館で調べてみたが確認できませんでした。ご存じの方はお知らせください。福本

La jaro 1996 estis "jaro de rato". Sekve 1997 estas "jaro de bovo". Kaj tiel 1998 estas "jaro de tigro".

Do 2007 estas ?

Jes, "jaro de apro".

La sekva jaro 2008 estas "jaro de rato", de-komence, rondo-ire.

Returne, 1995 (apro), 1994(hundo), ktp.

En kiu best-jaro vi naskiĝis?

Mi naskiĝis en 1912.

Do, kalkulu en kiu best-jaro mi naskiĝis.

En la Novjara Tago, jam en frua mateno preskaŭ ĉiuj japanoj vizitas sanktejon por kulti klaj ricevi talismanon aŭ amuleton por ke la familio estu feliĉa.

和歌山 WAKAYAMA

Julio, Agosto 1997

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirotsugu (dumonata) N-ro 95

**エスペラントで、もっと姉妹都市交流を！**

江川治邦

エスペラントによる民際は、本来特定の地域に限られたものでなく、個人の自由意志により、自立した地球市民として幅広い交流をめざすことにある。しかし、少数派の私達がより多くの市民にアピールし、この運動に参加してもらうには、現段階では身近な人々に納得してもらいやすい私達の行動と実績が重要な要素となる。これには姉妹都市間におけるエスペランティストの交流は格好のテーマのひとつと考える。日本の姉妹都市交流は現在のところ、各地方都市行政の国際交流課を中心とした官主体であり、全体としてセレモニーやイベントの域を出ておらず、相手市民の顔が見えてこないのが実状である。

そこで、相手市民の生活が見える記事を私達ボランティアがお手伝いしましょうと、1996年春、タウン紙「ニュース和歌山」の編集部に提案し、快諾を得た。同社は市民生活の出来事を広く伝えるために、和歌山各地区に市民のボランティアによる通信員を配置している。これに目をつけた私達は、姉妹都市の通信員を提案した次第である。韓国・中国・アメリカ・カナダ・フランスにある姉妹都市とはエスペラントだけで可能であるが、私の提案に賛同する他の言語グループの人達とのジョイント・ベンチャー方式で作業を進めることにした。グループ名をエスペラントで『インテル・ポポーラ』とし、エスペラントは中国とフランスを、英語チームはアメリカとカナダを、そして韓国語チームは和歌山大学の留学生達が自国を担当した。

テーマは「各姉妹都市の市民から見た和歌山のイメージ」、「結婚式」、「教育問題」と続き、数ヶ月に亘り各都市順に連載された。勿論エスペラントを媒介した記事については、翻訳者名や先方エスペラントクラブ名と投稿者名も末尾に記載された。中国・山東省の済南エスペラント協会の皆さんや、フランスのベルビニアン市エスペラントセンターの皆さんは、私達の要望に応じて熱心にレポートを送ってくれた。送られてくるレポートはそれぞれに楽しく、これらのボランティアと編集部の会合では、「エスペラントは素晴らしい」と言ってくれた。このようなオープンな作業にすることで、エスペランティストの間には他の言語グループの人

間関係にない強い連帯感があることが、解っていただいたからだと思う。また記事を読んだことでの市民の反応も寄せられ、これを姉妹都市の寄稿者にフィードバックすることで喜ばれた。今後はインターネットの活用も考えたい。また当然ながら関心を持ってくれた市民を講習会で勧誘してゆきたい。

昨年の上海でのアジア大会では、プログラムの合間をぬって、山東省世界語協会の参加者（20名のうち7名）とシルクロードホテルの喫茶室で会合を持った。内容はこのVerda Monteto誌92号で報告の通りであるが、要はエスペラントで出来ることから実行し、私達の内容ある交流を両姉妹都市市民に広報し、エスペラントを広めてゆこうということであった。

地方都市にあって、「エスペラントはどんな言葉？何をしているの？」と問われた時に、国際語としての原理原則を説明するより、姉妹都市にあるエスペラントクラブとの具体的交流や、地域社会でのエスペラントの貢献内容を伝える方が理解を得やすい。和歌山では他の言語グループに先がけて和歌山市の民話「和歌山むかしむかし」のエスペラント訳出版（これをもとに済南市で中国語訳が出版された）や、和歌山児童合唱団のヨーロッパ公演（オランダ・ベルゲン市とドイツ・ボン市）をエスペラントのネットワークにより実現させたことは、地域社会を説得するのに十分な材料と思っている。

今夏、わかやま絵本の会のご協力を得て、和歌山が生んだ聖医華岡青洲の絵本を出版する。華岡青洲会館が建設される好機を捕らえての企画である。これはグループ・インテルポボラの発行となるため、4カ国語（エスペラント・日本語・中国語・英語）での出版とした。本書は各姉妹都市の図書館への配布や、姉妹友好校への贈呈も考えたい。これは、地方文化の海外発信でもあり、言葉の勉強はもとより、姉妹都市市民間の相互理解の向上に役立ち、何によりもエスペラントの宣伝に寄与できることを期待している。また東南アジアでのエスペラント初級者の学習の手助けになればと考え、インド、シンガポール、ベトナム、中国のエスペラント協会へ送るつもりである。

日本では国際化が叫ばれて20数年になる。しかしまだ自立した市民による民際の域にまで全体として到達していない。この点、一日の長にあるエスペラントには他の国際交流グループと比べて優れたノウハウの蓄積があるのではないか。そうであれば、もっとオープンな形で市民に向かって提案し、実行してゆくことを心掛けたい。エスペラントにはエスペラントとしての言葉の説明やエスペランティスト同志の活動報告が多いが、市民と一緒に国際社会にどうかかわってゆくかという行動様式がそれらに比べて不足しているように思える。すなわちEsperanto por socio. という視点である。これにはperismoもporismoも内包され得る。地方にあってエスペランティストがこれを克服する身近なテーマのひとつに姉妹都市があると思う。

来年の第83回世界エスペラント大会は南フランスのモンペリエで開催される。和歌山県の姉妹都市ベルビニャンとは150kmの近隣に位置する。私はこの大会に参加し、途中ベルビ



ニャンエスペラントセンターを訪問しようと考えている。このため、今秋より御坊の道成寺に通い、安珍・清姫の絵巻による「妻宝極楽」説法を習得し、これをエスペラントで紹介しようと考えている。和歌山の文化を海外で紹介するということに道成寺の和尚さんも賛同してくれた。人間、人生は一回。好きなことで少しでも世の中のためにお役に立つならばこんな極楽はない。いろんな言語を話す和歌山の姉妹都市の市民と国際補助語エスペラントを媒介して交流し、楽しみ、そして共生に向かって創造してゆく私達の姿が市民の目にうつる時、エスペラントが市民に身近なものとして認識されることでしょう。このことを意識した学習と行動を望みたい。

---

## ***KARA, MANON DONU KORE!***

TACIBANA Kenji



*Kara, manon donu kore!  
Kaj ni dancu sub la lustroj;  
dume lasu la orelojn  
nur al miaj basaj flustroj!*

*Ho, la nokto plenjuneca!  
Ĉe la fingroj flamas sango;  
Ĉu ne vibras, vin allogas,  
tikla varmo, sur la vango?*

*Mem saltadu la piedoj  
laŭ la ritma melodio;  
ĉu ne flugas en la brustojn  
trila ĝojo de pasio?*

*Nun ripozu por momento  
sub la steloj rozariaj;  
ĉu ne volas viaj lipoj  
tuŝi ... ho jes! ... al la miaj?*

(江川さんより次のハガキを頂きました。)

『あるエスペランチストの回想』のp5に橋(健二)さんが出てきます。戦後、関西大会を和歌山で開催するのを機会にお会いしたことがあります。

北島橋を北へ渡って、すぐ左へまがった所の大きな家であったことを思い出します。以下、彼の tipa な経歴を書きます。

橋健二(KENJI TACHIBANA)さんは小児麻痺の為エスペラントを独習していたが特に詩がお好きのようでした。

和歌山ではあまり知られていないようですが1965年6月17日Stafeto 25 発行のjapana kvodlibreto に小坂狷二や宮本正男と肩を並べて彼の詩(1948年)が出ているので、ここで紹介させていただきます。

# あるエスペランチストの回想



No. 3

(Fedorčakとパフォーマンス)

田中正美

(manêjo de Vermicelo、うどん屋で)

ある日、3人連れでうどんを食べに行った。そこに来合わせたお客さん達10人余りは、外人を見て奇異な感を抱いたのかジロジロと見る。Fedorčakはテーブルの上にあった振りかけ用のトウガラシ瓶を持って、つっと歩き出した。見ていると一人一人のお客さんの前に立って、おどけた仕草をしながらお辞儀をし、食べているドンブリ鉢にトウガラシを振りかけている。Senpage! Senpage!と言いながら……。私はデメさんの後について、「これはタダです」と説明して廻ったが、冷や汗ものだった。なぜならトウガラシの嫌いな人や、適当に振りかけていたお客さんも居たはずだから。

さて、デメのパフォーマンス振りを書くつもりだが、今まで誰にも語ったことのない話を思い切って書いてみよう。

(Publika banejo、銭湯で)

ある夕方、私達3人連れで町の銭湯に行った。湯船の中は大勢の人でごった返しであった。デメは早速裸になって、準備体操みたいな事をやっていた。プロレスラーと見違えるような引き締まった肉体、余計な贅肉は何処にも残していない正に鋼鉄の如き体躯であった。風呂に浸ると、入浴客は一斉に珍奇な目をデメに注いでいた。デメは彼等にサービスのつもりか、おどけた格好をしながら浴槽の中央に立って、šipo, šipoと言いながら、浴客の間を行ったり来たりしている。一体何をしているのか、私は彼を注視した。(以下は表現しにくいので省略する、ご想像にまかせる。)

(プライベートな宴会で男性の裸踊りを何回か見たことがある。生まれたまんまの姿で踊っている本人は、宴会の雰囲気盛り上げようとのサービス精神の外に自分の肉体を誇示する考えも多分にあって、何れも筋骨たくましい人ばかりだった。)

(高野山参拝)

さて私達は日曜日を利用して高野山へ参拝に行くことにした。高野山へは、高野口から汽車と電車、ケーブルを利用すれば日帰りでも簡単に小旅行ができるので、デメと共に駅に向かった。汽車賃は各自負担である。この時、デメは高野下まで電車で行き、ケーブルは利用しないと主張した。私達はケーブルの区間は歩いて行った。急坂をよじ登るのはつらい行軍であった。高野山に着くと、丁度弘法大師1050年祭とかで多くの参拝客で賑わっていた。私達は別に頼んだつもりはなかったが、一人の若い僧侶が案内役を勤めてくれた。彼はお寺の由来や、灯籠の説明をしたが、まるでお経を唱えている如くで、私はどう訳してよいのか戸惑うばかりだった。デメは『何と言っているのだ』と私達を急き立てるのだが、...

『金堂の高さは〇〇尺、〇〇天皇の時代に建立されたのであります。』（ホンヤクは無し。全然無視。通訳なし。

途中、土産物店の並ぶ商店街に出た。ここに私の知人の土産物店があったので立ち寄ってみた。すると、ご主人は是非昼食をしてくれとのこと。応接室に案内され食事のご馳走に預かった。ご主人のお母さんや家族の人々、それに近所の人々が集まってきて、外人珍しさに私達を取り囲んでしまった。

この時集まってきた人々の質問と、Fedor ê akの応答は次の通りであった。

『日本の印象は？』

① Tre bela lando kaj domoj, kies pordo ne troviĝas seruroj.

② Japaninoj, kiuj sin vestas per Kimono, estas tre belaj.

②のところ、私は『日本の女性は大変きれいだ』と直訳したのだが、Fedor ê akは"Vi eraras."と言う。私は改めて、『着物を着た日本の女性は・・・』と訳し直したらOKが出た。

デメは皆さんの歓迎に応じて、ハンガリーの民謡を歌うと言い出した。彼はあの堂々たる体軀から、声量豊かな声で歌い始めた。Tra la stratoj, tra la stratoj . . . 。それはエスペラントであった。私は初めて聞いた彼の歌に感動した。



### ***Tra la stratoj***

***Tra la stratoj, tra la stratoj  
marŝas, marŝas la soldatoj  
Deksejara bruna junulino  
iras ĉe l' regimentflno***

***Kapitan' ŝin alparolas  
Junulin' vi kien volas?  
Kial tion scii vi deziras?  
Ja amatin' mi post-iras.***

大勢の観客の前で歌った歌に、皆んなから割れんばかりの拍手をもらったデメはすごく感動したのか、『これはおまけだ』と言って歌い出したのは、その当時大流行していた小林という女性歌手の唱う「涙の渡り鳥」であった。しかも日本語だ。全く正確な日本語だ。

『わたしや涙の渡り鳥. . . 』

私が漫筆を書いた時は、確か歌詞を憶えていて全部書いたと思うが、今はすっかり忘れてここに書くことができない。デメはこれを三番まで見事に歌ったのである。しかも両手を胸に当て、表情豊かに歌った彼の姿に、私達は期せずして喝采したのである。ところで彼は何時、何処で日本語の歌を憶えたのであろうか。しかも正しい発音だった。

店を出る時、ここでデメは絵はがきを買った。彼は店の人に、同じ風景のものを揃えてくれ

と言っていたが、店の人は10枚セットになっている旨を言った。デメは仕方なく一組を買った。記念スタンプを押したものを私は直ぐに揃えてまとめようとしたら、デメは目をむいて怒っている。“ankoraŭ freŝa”（まだスタンプが乾いていないじゃないか。）成る程、成る程。

その日は歩き通しで、私達はヘトヘトになっていた。デメだけは平気で、スタスタと歩いて行く。奥の院が今日の最後の行程になっている。鬱蒼と生い茂る樹木の立ち並んだ歩道に行く。何百年も前からそびえている古木の間には、歴史上の名高い人々の墓碑が並んでいる。デメはしきりに、そこにある碑のことや、その由来などを訊くのだが、私達にはそれを説明する余裕は全くないので、無視していた。やっと奥の院にたどり着いた。

奥の院の前には今でも置いてあると思うが、格子窓のついた囲いの中に、力ためし用の円形の石が置かれている。格子窓から腕を差し込んで、この石を持ち上げる仕組みになっている。デメは早速、この石を手の平に乗せ、上段の置き場所へ移す作業に取りかかったが、何回やっても失敗した。私も試してみたが駄目だった。何分にもその石は、大勢の人の脂のせいかピカピカに光って滑りやすくなっていた。

参拝を終えて帰路についたが、横垣も私も一日中歩き通しのために疲れ切っていた。物を使うのも億劫で無言の状態が続いた。突然デメは私達に言った。

Vi estas... Via kapo meritas eĉ unu rusan kapekon!

一人称だったが、私や横垣に対して言ったのであろう。私は少し頭に來たが辛抱した。横垣はと見たら、いつの間にか居なくなっていた。恐らく先に帰ったのであろう。仕方がないので、デメと二人でケーブルの乗り場まで行った。

ふと駅舎のかげから横垣が出てきた。私達の來るのを待っていたらしい。機嫌は直っていた。さて私は切符売り場に行ってデメを待っていたが、彼は一向に來ない。デメを促すと、彼は「帰りは歩いて行く」と言うのである。彼にその理由を聞くと、次のように答えた。

“la vetura kosto de tiu vagono estas tre altkosta, la plej kara en la mondo”

そして曰く

“la kompanio estas publika ŝtelisto jure permesita”

とは言うものの、私達はもうこれ以上歩く気力は無い。途方にくれていると、横垣は切符売り場に走った。そしてデメに一枚の切符を差し出して、“Jen via”と言って渡した。デメは笑顔で受け取って、“bone, bone, tre bone”, “do ni kune envagoniĝu”と言いながら電車に乗り込んだ。

かくして高野山参拝は終わった。

デメは翌朝、高野口駅から名古屋へ旅だった。この時見送ったFedor ĉakは再び私達の前にその姿を現すことはなかった。

それ以後彼は何処へ行ったのであろう？

そして何時日本を去ったのであろう？

(daŭrigota)

# LA MALGRANDA SORĈISTINO

小さな魔女

La Maronvendisto - 3 -



☆ 活字の部分は、本曜会の訳文です。

☆ 手書きの部分は、前田先生に御指導を戴いた訳文です。

Sur la foirplaco staris mallarga, verde farbita lignobudo. Antaŭ ĝi staris fera forneto; kaj malantaŭ la forneto staris dorsekontraŭ la budo malgranda, ŝrumpita vireto. Tiu surhavis vastan ĉaristan mantelon kaj feltŝuojn. La kolumon li estis levinta, kaj la ĉapon li estis tirinta sur la vizaĝon. De tempo al tempo la viret ternis. Tiam gutoj falis sur la ardan foirplaton kaj siblis.

“kion vi faras tie?” demandis la Malgranda Sorĉistino.

“Ĉu vi ne vidas tion? Mi-haĉ!-mi rostas maronojn.”

“Maronoj? Kio estas tio?”

見本市の広場に緑色にぬったせまくるしい木小屋が建っていました。その前に小さな鉄のストーブが置いてあって、その後ろに小屋を背にして しわくちやの小男が立っていました。

彼はフェルトのくつをはいて御者用のマントを着ていました。彼は衿を高く立て帽子を顔の上まで (sur) ひっぱり下ろしていました。時々彼はくしゃみをしました。するとそのしづくが燃えさかっているストーブの板金の上に落ちると、シユウシユウ音を立てました。

“こんなところで何をしているの?” と小さな魔女は尋ねました。

“あんたはそれを見ないのか? (これ見ないか?) わしは... ハックション!... 栗を焼いてるんだ。”

“栗? 栗って何?”

"Mangeblaj kaŝtanoj ili estas", klari-  
gis la vireto. Tiam li levis la kovrilon  
de la forneto kaj demandis ŝin: "Ĉu vi de-  
ziras kelkajn? Dek fenigojn por la malgr-  
anda papersaketo kaj dudek por la granda.  
Ha -a-ĉ!"

Laodoro de la rostitaj kaŝtanoj atingis  
la nazon de la Malgranda Sorĉistino.

"Mi tre volonte gustumis, sed mi ne kun-  
portis monon."

"Tiam mi esceptokaze volas doni al vi  
kelkajn senpage", diris la vireto.

"En tiu siberia malvarmego vi nepre bezon-  
as iun varmajon. Haĉ, tiel estas!"

La vireto blovpurigis la nazon per la  
fingroj. Poste li prenis manplenon da kaŝ-  
tanoj el la rostujo kaj metis ilin en sa-  
keton el bruna pakpapero. Tiam li donis  
al la Malgranda Sorĉistino kaj diris:

"Jen, prenu ilin! Sed vi devas senseligi  
ilin antaŭ ol ŝovi en la buŝon."

"Koran dankon", diris la Malgranda So-  
rĉistino kaj gustumis.

"Ha, ili estas bongustaj!" ŝi kriis surp-  
rizite kaj poste ŝi diris:

"Sciu, vin oni povus envii! Vi havas faci-  
lan laboron kaj ne bezonas frosti, ĉar vi  
staras ĉe varma forno."

"Ne diru tion!" kontrauis la vireto.

"食べられるどん栗だよ。"と小男は説  
明しました。彼は小さいストーブのカバー  
(コンロのふた)をあけて、彼女に質問し  
ました。"いくつか欲しいかい? 10個  
の小さい紙袋と20個の大きい紙袋があり  
ます。(小さい紙袋で10ペニー、大袋  
で20ペニー…… La kaŝtano kostas  
が省略されている…… Dek fenigoは値段  
のこと。)

ハクション!"

焼けた栗の匂いが小さな魔女の鼻に漂っ  
てきました。"私はとても食べたいけれど  
お金を持っていないわ。"

"それなら例外として、(特別に)ただ  
であげよう。"と小男は言いました。"シ  
ベリアのような寒さの中ではあんたは何か  
温かいものがきつと必要だ(あんたもきつと  
何かあたたかいものがほしかろう。)  
ハクション、ほらね!"

小男は指で鼻をほじくりました。(さつ  
こすりました。)そして焼き釜から手に  
一ぱいの栗(ひとつくみの栗)をつかみ  
だして茶色の包み紙の袋へ入れました。そ  
れを小さな魔女に与えて言いました。"さ  
あ持って行きな、けど口へ押しやる前に  
(口へほうりこむ前に)皮をむかねばならない。



"有難う"と小さな魔女は言って味わい  
ました。

"あら、おいしい!"と彼女はびっくり  
して叫びました。そのあと彼女は言いま  
した:人はあんたをうらやましがるにちが  
いなし、容易な仕事を持っているし、凍え  
ることはないし、なぜって温かいストーブ  
のところに立っているんだから。"

"そんなこと言わないで!"と小男は反論  
しました。("とんでもない!"と言いつ  
つ返しました。)

(次号へ続く)

和歌山 WAKAYAMA

Septembro, Oktobro 1997

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirotsugu (dumonata) N-ro 96

## コンスタンスさんが再び和歌山へ

(オランダのS-ino Constance HARVEY さんが10月に和歌山を訪問予定)

約11年前、オランダで難病のALS患者へのボランティア活動をしているコンスタンスさんが、京都で開催のALS世界会議に出席の途中、和歌山に立ち寄った。

世界的にみて、ALS患者が和歌山県に多く、この点で和歌山医科大学の研究が進んでいることもあり、和医大研究室に案内した。当時、田端和医大附属病院長(後年の和医大学長)も出迎えてくれた。コンスタンスさんがカナダ人であり、田端病院長は青年時代カナダに留学したこともあり、話はずんだことを思い出す。

その後、病院の近くの喫茶店で和歌山緑丘会の歓迎会があった。そんな関係で1988年のロッテルダムで開催の第73回世界エスペラント大会に出席の時、ベルゲンの彼女の邸宅でご馳走になり、有名なオランダの風車や干拓地等を案内していただいた。

また1992年、和歌山児童合唱団のヨーロッパ演奏に際し、ベルゲン市での公演と総勢52人のホームステイのお世話を一手に引き受けてくれた。

先日彼女の彼女からの手紙によると、今年の10月5日に日本に到着後、12月15日まで日本各地のエスペランティストを訪ねての旅が予定されている。『和歌山には是非立ち寄りたい』と書いている。和歌山のために働いていただいた彼女を心から歓迎したいと考えますので、緑丘会の皆様のご協力をお願いします。

5月1日付けの手紙によると、彼女の娘さん Bregje (31才)は、1996年に南アフリカの Salt 市で開催された世界空手選手権大会で銅メダル(3位)を獲得したこと、また、1997年 Ruhrlandhalle (ドイツ)で開催のヨーロッパ空手選手権大会で、「形」および「組手」の部で金メダルを獲得したことを知らせている。

Bregje も 1985 年以来のエスペランティストで、アウグスブルグ（1985 年）とワルシャワ（1987 年）の世界エスペラント大会にも参加している。

（余談）当時コンスタンスさんを京都までご案内した途中、大阪駅で東京発長崎行きの特別列車と出くわした。オランダ村ハウステンボス行きのキャンペーン列車で、東京オリンピックの柔道無差別級で金メダリストとなったヘーシングさんが乗っていた。ホームは出迎えの人々であふれていた。私はコンスタンスさんの案内で、人垣をかき分けてヘーシングの前に立ち、彼女の通訳で彼と話をし、握手をした光栄を思い出します。（江川治邦）

---

## あるエスペランティストの回想



No. 4

### （戦前の運動）

田中正美

私はこの稿を書くために古い日本エスペラント学会の機関誌「Revue Orientale」を引き出してきた。私の手元にあるのは、1933 年（昭和 8 年）以降、現在まで殆ど揃っている。それを手掛かりにして、その後の Fedor ĉak の足取りを調べて見たが何も見出すことが出来なかった。

私が一番心配したのは、彼は当局からスパイの容疑をかけられているという風評を耳にしたからである。当時はエスペランティストは危険人物として見られていて、特高は尾行したり、警察に出頭させてわれわれを悩ましたものである。私も例外ではなかった。この事は稿を改めて書く。さきの Fedor ĉak が日本に来る直前、広東でエスペラント講習会を開いた時のことを書いた Chen Yuan さんのレポートを借用する。

Fedorĉak, kien iris la inĝeniero, forlasinte Kantonon?

Ĉu li revenis en sian hejmlandon?

Chen さんは、ヨーロッパに行った時、ハンガリーの古いエスペランティストやその他の知人に彼のことを聞いてみたが何れも徒勞に終わった。

### （田辺支店勤務時代）

私が田辺支店勤務を始めて 2 年目、横垣が私の下宿にやって来た。2 ヶ月余り彼と一つ屋根で過ごすことになった。彼はその時、秋の文展へ出品する作品の制作準備中だった。私達は Fedor ĉak のお陰で、エスペラントで不自由なく会話が出来た。今思うと、結局若さと度胸だったと思う。人の前でもエスペラントで話すことは一種のプロパガンダだと自負していた。

横垣は毎日画架をかついで大浜海岸等へ写生に出かけていた。写生したものの中には、未完のものや、出来上がったものもあり、下宿の部屋はそれらで占領されていた。



ある日曜日だったが横垣を尋ねてきた中年の紳士があった。横垣は自分の描いた作品の批評を頼んだものらしい。後で聞くと、その人は白浜に住んで居られた二科の原勝四郎先生だった。

夕方は、私達は散歩がてら街を歩いて、行きつけの喫茶店に落ち着くのが日課となっていた。その日は、横垣の姿は下宿には見当たらず、私一人でブラリ散歩に出て行き、いつもの喫茶店へ入った。フト見ると、横垣はすでに来ていて、見知らぬ女の子と話をしていて、可成り親密な様子である。女の子はと見れば、田辺では見かけないスマートな容姿の人である。一寸日本人離れたスペイン系の女の子である。私はツット彼の前の椅子に座った。するとテーブルの下から横垣の手が伸びてきて、私の手の平に何か握らしてきた。

“Foriru tuj”（とっとと立ち去れ）と彼は私に言う。私は何のことか分からぬまま外へ飛び出した。手の中のものを見ると、1円札1枚だった。これは有り難い。1円あれば、関東煮きで一杯飲める。ご機嫌になって下宿に帰った時は、夜もかなり深まっていた。横垣の姿はなかった。

#### （エスペラントと特高）

ある日、宮本が私を訪ねてやって来た。エスペラントの会話をやりたいという。私は彼を連れて闘鶏神社へゆき、ここの由来を話し、次いで大浜海岸を散歩して廻った。ずーとエスペラントで説明した。その時彼は、治安維持法で別荘ゆきをして、出てきた直後だった筈である。戦後の彼の葉書には、「田辺へ行ったのは、同志との連絡をとるためだった。ところが田辺から帰って来るのを待ち構えていたかのようにポリさんにパクられてしまった。」と書いてあった。この時の宮本の葉書は今でも私の手元にあるが、細い字で（コレは書くな）と書いてある。ずいぶん昔のことだからもういいだろう。

1936年暮れ、和歌山商工会議所でザメンホフ祭が開かれた。呼びかけ人は当時県の商工課に勤めていた岩崎さんであった。私は会社を早めに出て和歌山へ向かった。今のように急行はなく鈍行だったから、着いた時は集合時間ぎりぎりであった。会場にはすでに14～5名の人が集まっていた。私が受付の前に立つと一人の僧衣を纏った若い人が話しかけてきた。Kiu vi estas? Kia nomo? El kie vi venis? 矢庭にエスペラントで話しかけてきた。私が名前を告げると、彼は会場に向かって叫んだ。Venis Tanaka el Tanabe!

このザメンホフ祭に（私は忘れていたのだが）宮本も出席していたことを、彼からの手紙で知らされた。その文面の中に席上、横垣は来ていたが、前田さんの顔は見えなかったと書かれていた。僧侶姿の人は服部保さんと言って、私の隣に居た人の説明では、みんなは彼のことをstranguloと呼んでいるということだった。私は密かに彼を観察すると、なるほどと理解できた。第一、僧衣を纏ってエスペラントをまくし立てている姿は、凡人の出来ることではない。彼は徹頭徹尾エスペラントを使った。相手が理解しようとしまいと不関の態度だった。

後年、宮本に彼のことを聞いたら、彼はその後大阪府下の高校で教師をしているということだった。宮本が彼に何処かで会ったときは、昔のように僧衣を着て、相変わらずよくしゃべっていたと話していた。

会合がすんだ時は11時を過ぎていた。夜行列車はなく途方に暮れていると、和歌山新聞社に勤めている若いエスペランチストから和歌浦から船が出ることを教えられ、それを利用することにした。その青年は親切にも新聞社員の臨時出張証明書を持ってきてくれた。お陰で割引運賃で翌朝5時すぎ、田辺文里港につくことを出来た。

岩崎さんは県庁を退職した後、和歌山商工会議所の理事長を長年務めた人である。今この人が生存していたら、あのザメンホフ祭に集った人たちのことも伺えるのに残念に思う。

昭和12年以降は、軍国主義一色で時の政府は戦争突入を計画していたから、政府のやり方に反対したり批判したりする者は一人残らず拘束したのであった。私も例外ではなかった。私は労働運動に参加していた訳ではないのに特高警察は私を危険人物としてマークしていた。田辺警察の二名の警察官が常時私を監視していた。

昭和14年6月、私は銀行を辞めて、海南市で古本店を開いた。私は独身であったから転業したのだった。今で言う脱サラと言うところだろう。ところが開店早々、一番手に訪ねてきたのは私服の二人であった。名詞をみると二人とも海南警察署の特高である。この二人は私に赤紙（召集令状）が来るまで常時やって来た。

当時、海南市には二人のエスペランチストがいた。山県、青木の両氏。戦時中だったこともあってエスペラント運動はやっていなかったが、田辺から海南に来た私のことを知って、開店のお祝いに来てくれたのは何よりもうれしかった。

翌年初春、結婚して間もない私達の店に一人の軍人が入ってきた。長靴を履き、腰に軍刀をつけた長身の人であった。差し出した名刺をみると、和歌山憲兵分隊、憲兵軍曹荒木五郎とあった。私は用件を聞くと、それには答えず彼は店に並べてある書籍をあちこち見て廻っていた。どうやら思想関係のものを探しているらしい。何も見当たらなかったのか暫くして奮然として立ち去った。傲慢の一語につきる。

私と妻は顔を見合わせて、出ていく彼の背を憎しみの目で見ている。この時、一冊でも思想関係の書籍が発見されたら、それを理由に拘束する予定だったのであろう。 (Fino)

---

## "Miru Pensu Ridu" (1950)

El ege malnova libro: ずい分 昔の本から、今に通じる お笑い

Vidvino igis skribi sur la tomoŝtono de sia mortinta edzo:



Ripozu en paco  
ĝis kiam ni revidos nin!

(kaj Kio okazos poste?)



(ハノイのホーチミン廟の前で：VEA役員と)

8日。朝からハノイへと向かう。ノイバイ空港ではVEAの会長などが出迎えてくれ、自動車ホテルに直行し、一休みする。午後VPEAの最初の会長グエン・バン・キン氏の墓参りをする。共産党の歴代書記長などの墓もあり、ここには一般の人の墓はないとのことであった。

9日。朝は市内の文廟、一柱寺などを見学する。文廟には、中国に倣って導入されていた科挙の合格者全員の名前が年代順に記されている石碑を背負った石の亀が沢山並んでいる。ベトナムでは現在ローマ字を使って表記しているが、かつては日本と同じく漢字が国家の言語であった時代が続いた。しかし今では、中国系の人の一部しか漢字の読み書きはできない。漢字を捨ててしまったことは、ちょっと残念な気もするが、歴史のなせることで仕方がない。(ちなみにハノイとは「河内」、ノイバイ空港は「内牌空港」とのことである。)

午後は40周年大会に参加する。参加者は70名程である。外国からは、私たち2人と西園寺さんであった。西園寺さんはベトナムのエスペラント仲間では知らぬ人はいないくらい有名人で、「湧命法」はよく知られていた。ホーチミン市からは後で分かったが数名であった。他の地区からの参加があったかどうか訪ねなかった。最初にベトナム国歌と「エスペロ」を歌う。挨拶はベトナム語が多く、エスペラントの通訳が付かなかったので、内容は良く分からなかった。エスペラントの挨拶は、ダオ・アン・カさんがベトナム語に逐次訳してくれた。私は壇上にいながら写真を撮ったりし

て落ち着かず、挨拶の内容については記憶に残らなかった。この記念大会で「ベトナムエスペラント協会」の健在ぶりを対外的に示せたのが成果ではなかろうか。来賓は別として、もっとエスペラントでの挨拶が欲しかった気がするが、参加者の中にはエスペラントを解さない人も含まれていそうである。集会のあとは、お茶とお菓子が用意されていて、参加者とは少しだけ話げできた。しかし、私にエスペラントで直接話しかけてくれたひとと、書記長のホン・ハックさんが通訳してくれた人で、時間も少なくて十分な交流にならなかった。

夜はホテルで食事をし、還剣湖（ホアン・キエム湖）の周りを散歩する。ホテルから湖までは歩いて5分程なので、何度かここを歩くことになった。湖の周囲は数十メートルの幅に公園になっていて、朝はあちこちで体操や、バドミントンをしている。昼間は土産物売りの子供等がしつこく迫ってくるので、何個か買わされてしまう。子供たちは路上で、観光客相手に実践しながら英語を学んでいる。先生も学習書もなしに、通じる外国語を身につけている。われわれもこの点は学ぶ必要があるかもしれない。「使う必要があるから修得できる。必要のない言語は習得できない。」

（VPEA創立40周年記念大会）



# LA MALGRANDA SORĈISTINO

小さな魔女

La Maronvendisto - 4 -



☆ 活字の部分は、木曜会の訳文です。

☆ 手書きの部分は、前田先生に御指導を戴いた訳文です。

“Se oni staras en la malvarmo la tutan tagon, oni tamen frostas. Tiam ankaŭ la fera forneto ne helpas. Per ĝi oni eĉ brulvundas la fingrojn elprenante la varmegaĵojn maronojn. -Haĉ!- kaj krome? Miaj piedoj estas paro da glacipendaĵoj, tion mi diras al vi! kajeĉ la nazo! Ĉu ĝi ne estas ruĝa kiel kandelo de kristnaska arbo? Mi ne plu povas liberiĝi de tiu nazkataro. Estas malesperige!”

Kvazaŭ konfirme la vireto ternis denove. Li ternis tiel korŝire, ke la lignobudo ŝanceliĝis kaj la foirejo resonis de tio.

Tiam pensis la Malgranda Sorĉistino:  
Tion mi povas ŝanĝi! Atendu iomete....  
Kaj ŝi murruris sorĉdiraĵon, sed kaŝe.  
Poste ŝi demandis:

“もし、一日中この寒さの中で立っていたら、やはりこごえるよ。鉄のストーブも役に立たない。高温の栗をとりだして、やけどさえる。(こんろで 熱くばった 栗を取り出す時、やけどもするしな。) -ハック! ショー- その上、わしの足は一對のツララだ。それを わしはあんたに言いたい。(tion mi diras al vi ⇒ まったく!) それに鼻さえも! この鼻はクリスマスの木のローソクみたいに赤くはないかね? わしはそんな鼻カタルから解放されることはない。絶望させる!” (もうのめられやないんだ。まったく かわらんぞ!)

確かめるように小男は再びくしゃみをしました。彼は、木小屋がゆれ動き見本市広場が反響するくらいに、胸をひきさく様なくしゃみをしました。(とても 痛々しいくしゃみで、そのために 木小屋が揺られ、市場の広場に くしゃみが こだましました。)

その時、(そこで) 小さな魔女は考えました: わたしは それを変えることができる! (ŝanĝi ⇒ よくして あげられる!) ちよっと待って....そして彼女は魔法の呪文をつぶやきました。そっと。そのあと彼女はたずねました:

"Ĉu vi ankoraŭ havas malvarmajn piedfingrojn?"

"Momente ne plu", diris la vireto. "Mi kredas, ke la malvarmo iom malpliigis. Mi sentas tion je la nazopinto. Kio do okazis?" "Ne demandu min", diris la Malgranda Sorĉistino, "mi nun devas rajdi hejmen."

"Hejmen-rajdi?!"

"Ĉu mi diris rajdi? Vi certe misaŭdis."

"Supozeble estis tiel", diris la vireto. "Gis revido!"

"Gis revido", diris la Malgranda Sorĉistino. "Kaj koran dankon!"

"Ne dankinde, ne dankinde, neniam kaŭzo!"

Tuj poste kurante venis du knaboj trans la foirejo kaj kriis: "Rapidu rapidu, sinjoro Maronvendisto! Alĉiu por dekfeniga monero!"

"Jen, bonvolu, dufoje por dekfenigoj!"

La maronvendisto metis la manon en la ro-stujon. Sed unufoje en sia tuta longa maronvendista vivo li ne brulvundis la fingrojn per la varmegaj kaŝtanoj.

Li neniam plu brulvundis ilin. Kaj ankaŭ neniam plu li frostis je la piedfingroj. Kaj ankaŭ ne je la nazo. La kataro estis kvazaŭ forblovita por ĉiam. Kaj kiam li foje tamen emis terni, tiam la bonkora maronvendisto devis preni iom da snuftabako.

"まだ足の指はつめたい?"

"もう 冷たくないよ"と小男は言いました。"わしは寒さが少しましになったと信じている。(寒さが少しゆるんだように思うね) 鼻の先で感じるよ、どうしたんだろう?"



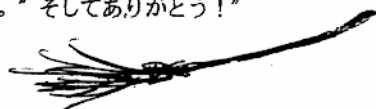
"わたしにそれを問わないで"と小さな魔女は言いました。"わたしは家へ乗って帰らなければ"

"家へ...乗って?!"

"わたし、乗ってと言った? きっとあんたの聞き違いよ"

"多分そのようだね"と小男は言った。

"さようなら"と小さな魔女は言いました。"そしてありがとう!"



"どういたしまして"(何でもよいよ!  
<お礼を言ってくれなく何のkaŭzo  
(理由,根拠)もよいよ> )

そのあと、二人の子どもが見本市場を突きぬけて(正確から)走って来て叫びました。"早く早く、栗やおじさん、10ペニーの栗をわたしたちに下さい"(A! 色々ひりひりに⇒ほくらに!)  
"さあ どうぞ(はいよ、まいした) 10ペニーのを二袋!"

栗売りは手を焼きなべの中へいれました。でも、彼は長い栗売りの人生を通じて、熱い栗で初めて指をやけどしなかったのです。(こんなことは、栗屋さんが長い間栗屋のしごとをしていてはじめてのことです。)

そして又、鼻も。鼻カタルは、その後ずっとまるで吹き飛ばされたようでした。そして、くしゃみをしたくなった時に、心やさしい栗売りは、少しのかぎタバコをとり出さねばならなくなりました。

かぎタバコを少し⇒使うことになりました。)

(Fino)

和歌山 WAKAYAMA

Novembro, Decembro 1997

# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirosugu (dumonata) N-ro 97

## Mia frua ekŝiĝo tra amara laboro kaj serĉadi la vivĝojn per Esp.

EGAWA Harukuni

Finfine mi ekŝiĝis du jarojn pli frue ol je 60-jara aĝlimo.

Jam pasis 40 jaroj depost mia eklaboro. Ja mi persistadis kiel unu el ekonomiaj animaloj, de frua mateno ĝis profunda vespero ĉiutage en mia okupo, tamen kompreneble por mia pano. Dum tiom da jaroj mi spertis la preskaŭan bankroton de mia kompanio, ĝian nomŝanĝon kaj neforgeseblan petrolkrizon.

Kiel la laboristo en la komerca fako ĉiam min okupadis la severaj negocoj kaj konkurencoj superi aliajn. Por glate plenumi la taskon mi devis legi ĉiutage plurajn ĵurnalojn por akiri konon persvadi, akumuli pli avantaĝajn informojn, kolekti pli valorajn novaĵojn kaj plibonigi mian talenton de golf-ludo, maĝango, sociala danco kaj kantado per Karaoke en drinkejo, kie mi sintenas por ne doni malagrablecon al miaj klientoj kvazaŭ vira geĵŝo.

La klientoj ĉirkaŭ mi estas diversaj: laboristoj en fabriko, kompaniaj direktoroj, laboratorianoj, oficistoj kaj eĉ profesoroj. Vero kun malvero, principo kun vera intenco ĉiam kunestas danĝere dum negocado. Sed konklude menddecido kuŝas en la mano de kliento. Do, kliento estas reĝo. Tamen surgenue peti al li estas mizere kaj tia negoco neniam alportas bonan frukton. La faktoroj por akiri mendon konsistas el la kvalito pri varo, la prezo, la uz-celo de kliento, la kosto kaj la homrilato inter vendisto kaj kliento.

Tio estas la mondo de kapablo en libera merkato ekster sia kompanio, kvankam estas hazardo, kio tamen ne daŭras longtempe. Sed bedaŭrinde en kompanio ankoraŭ regas ene tiel nomata diskriminacio kiel sekso, aĝo

kaj lerneja kariero. Do, kapablo ekstere prilumata ofte baras sian promocion en fermita mondo. Sed tia fenomeno devos degeli vole-nevole en la venonta jarcento por konservi japanan bonan konjunkturon, mi pensas.

Kapablismo disvolviĝos en libera, nereguligita de registaro kaj malfermita mondo. Sed aliflanke plua prizorgo al hadikapuloj, maljunuloj, ekloĝantoj el aliaj landoj kaj pli bona medio estos des pli bezonata laŭ la disvolviĝo de libera konkurenco. En tia mondo, sindediĉa kaj volontulema agado estus estimata kaj spegulata kiel alta moraleco.

Traviva eduko sur memstaro florados diverskoloro en tia direkto kaj ankaŭ prosperos nia Esperanto ne sole kiel inteligentula hobbio sed kiel praktikilo por socia servo. La ŝlosil-vorto por la 21-a jarcento povas esti "HOMO", pri kiu politiko, religio, eduko kaj ekonomio devos denove rekoni sian strarpunkton.

Ĉiutaga frekventado per trajno dum 34 jaroj inter Ŭakajama kaj Osaka lacigis min ĝisoste. Sed mi ne forgesis kunporti la vortaron de Esperanto kaj organojn en mia teko. Mi povis legi ilin en trajno. Por mi tiu okazo estis Verda Tempo konsolata for de laboro pelata de peza normo kaj hejma afero.

Bastono por apogo antaŭ ol falo! Tuj post la eksiĝo mi konsultis kuraciston. Apenaŭ mi rimarkis min sana, mi tuj komencis vivi kun Esperanto: legi laŭvole libron en Esperanto, eklemi interreton per Esperanto, traduki la bildolibron "Hanaoka Seiŝu" de "Ŭakajama Ehon no kai" (Societo de bildlibro en Ŭakayama) en Esperanton, sinpreparo al U.K. kaj provi la komercon kun ĉino per Esperanto, kio estus profitdona al Azia Movado, se sukcesa.

De venonta aŭtuno mi ekzercos min ludi la bildrakonton pri Anĉin kaj Kijohime, pri kio la bonzo de la templo Doĵozi permesis min aktori en Esperanto. Se la de mi aktorota ludo fariĝos kontentiga, mi esperas prezenti ĝin al precipe Esp-istoj en la ĝemelaj urboj en estonteco okaze de mia vizito. Kaj se prezenti tiamaniere lokan kulturon per Esperanto helpas internacian kompreniĝon kaj fariĝos bona propagando por Esp., mi estas tre feliĉa.

Post la eksiĝo ĉiuj tagoj estas dimanĉoj por mi. Sed homa vivo havas limon. Do, mi kreu mian vivĝojon per amata Esp., kun kiu mi jam estas forte ligita kiel mia sorto.





10日。ハノイ友好協会連合会を訪問した後、前会長ダオ・アン・カさんの自宅を訪ねる。この訪問で市内の住宅の様子が少しわかる。我々のために書いてくれた詩を朗読してくれる。ダオ・アン・カさんは詩人とのこと、彼の詩集をプレゼントしてもらおう。ベトナムでは折りにふれて詩を贈ることがあるそうだが、知識人の間のことかもしれない。「歌垣」の習慣が中国西南部の少数民族やベトナム北部



ダオ・アン・カさんの家でご夫妻と一緒に

の地域に残っているので、即興の歌を歌うのは伝統的かもしれない。

次に、彼の送ってくれた詩のエスペラント文と、ベトナム語訳を見てください。

ベトナム語は現在ローマ字で書かれているが、元々中国語と同じように、単音節語(一つの漢字に対応する)の組み合わせでできている。声調は6声で、中国語の北京

Hanojo, la 12-an-12-1996

Adiaŭo

DAO ANH KHA

Nu hejmen, vin atendas la sakura sezon'  
 Jen glaso krizantema de ĉi-nia aŭtun'  
 Persikojn ne forgesu, nepre vi revenos  
 Printempoj novaj per am-kantoj vin plu benos

Al Kumaki H.  
 Fukumoto H.  
 Saionji

( en vjetnama ligvo )

Tiền dĩa

Vâng, anh về, mùa anh dạo ngóng đợi  
Chén cúc nồng thu dướm tiền chân nhau  
Đây có dào, xin đừng quên trở lại  
Sẽ đón ngày xuân mới, hát tình sâu

の4声ではなく、広東語の6声に似ている。従ってこの詩も、もし漢字で書けば、漢字8文字の4行に表されることになるだろう。

詩では、sakura と kizantemo で日本を暗示している。persiko は詩人の姓の Dao で、漢字で書けば「桃」である。ベトナムでは新年（旧暦の正月）に、桃の枝を飾るそうです。旧正月はまた春を意味します。 (続く)

田中正美さんの「あるエスペランティストの回想」に次の原稿を付けるつもりが、遅れてしまいました。お詫びして、掲載します。また、奥村林蔵さんの「十二支の記事」へのコメントも頂いておりました。

一期一会



一期一会 (いちごいちえ) という言葉がある。茶人千利休の弟子の宗二の書いた本に出てくるという。Fedorcak との出会いには正にこのことを表している。これをエスペラントで書いてみた。これは皆さんへの宿題のつもりです。

**Unu foja renkontiĝo  
en viv-tempo,  
Unu foja renkontiĝo  
en tuta vivado.**

<< ベトナムでは水牛になっている >>

この間、ベトナムの十二支のことが書いてあったと思いますが、私の持っているベトナム発行の本の中で、日本と同じ十二支を使っています。ただし、牛 (bovo) は『水牛』(bubalo) になっています。ベトナム発行の本は大分読みました (10冊程) が、そのどれに載っていたかは分かりません。 (田中正美)

## エスペラントで書くむつかしさ

江川治邦

エスペラントの原作ものベストセラーといえ、Cazaro Rossetti の “Kredu min sinjorino!” である。内容のおもしろさは勿論のこと、歯切れの良い表現はうならせる。まだ読んでいない方は是非一読されたい。すでにハンガリー語、ポーランド語、日本語と英語に翻訳出版されている。ハンガリー語版は1ヶ月で2万冊が売り切れた程である。

弟の Reto も熱心なエスペランティストで、多くの原作を発表している。最近、彼の “El la amiko” を読んでみた。そこで感じたことは、エスペラントからの日本語訳は辞書と文法書を片手になんとかできて、エスペラントで文章を書き、意に添った表現をすることは大変難しいと言うことである。それにはエスペラントの本を多く読むこと以外にないらしい。

“El la amiko” には次のような文章があった。こんなエスペラント表現には相当の経験を積む必要がある。仮に右側の日本語ならあなたはエスペラントでどう表現しますか。

- |   |  |
|---|--|
| ① li haltis en sia paŝegado   | ① 足早に止まった  |
| ② klaĉema, ventokapa virino   | ② うわさ好きの軽率な女   |
| ③ ekvidis ŝin dumpase   | ③ 通りすがりに彼女をちらっと見た  |
| ④ Neniu virino min svate rigardas.  | ④ どの女も私を結婚相手として見ていない   |
| ⑤ rigardis min disokule   | ⑤ きょろきょろと私を眺めた   |
| ⑥ en la momento de ekrigardo  | ⑥ 見た瞬間   |
| ⑦ adaptante sian paŝadon al la ŝia  | ⑦ 彼女に歩調を合わせて   |
| ⑧ la parolo turniĝis sur la temo de ~   | ⑧ 話は～の話題に移った   |
| ⑨ la vaske klara haŭto  | ⑨ (日本で言う) 「もち肌」か   |
| ⑩ Frosto trakuris min.  | ⑩ ぞ～とした。   |
| ⑪ post rapida ĝis-saluto al ~   | ⑪ ~に早々に挨拶をすませて   |
| ⑫ Kiel mi morgaŭ povus montri la vizaĝon?   | ⑫ 明日は人前に出たくない<br>(世間に合わず顔がない)  |
| ⑬ Mi ne estas ventoflago sed principulo   | ⑬ 私は人の言いなりにならない、<br>自己主張のできる(意見の持った)男だ。  |
| ⑭ kion vi kaŝas sub tiu kasita ekstero.<br>Bili? Amotigro, ĉu? La kaŝita donjuano<br>de la klaso? | ⑭ ビリー、お前は仏顔(ほとけづら)を<br>している(おとなしく装っている)が、<br>そうではないだろう? 送り狼か?<br>(日本では amolupoとなるのか)<br>このクラスの角に置けない女たらしか? |

# Zamenhofa Festo 1997

和歌山緑丘会

Wakayama klubo Verda Monteto

ザメンホフ祭 ご案内

日時：1997年12月 6日  
12時～

場所：サロン「会」（いつもの場所）

参加費：1000円

（コーヒー、お菓子、軽食あり）

（参加者は福引き用の賞品として1人

1個、不要品又は2～3百円程度のものをご用意下さい。日本エスペラント学会、関西エスペラント連盟の会員の方は会費も集めます。）

- ◎ Joel Brozovsky さんが来られます。
- ◎ 宮本さんの楽しい腹話術があります。
- ◎ ザメンホフ祭は世界中でこの日になっています。今年はK L E Gより本の販売あり。
- ◎ エスペラントと関係の深いユネスコの話しがあります。
- ◎ その他、色々あり。多数ご参加を！！

会費の払い込みは、干振替をご利用下さい。（印刷費、郵送費として使用します）

振込番号：「大阪 6-3630」 名義：和歌山緑丘会 会費：年3000円

家族・学生は1000円 会計係 〒640-8412 和歌山市狐島65-12 牛島美恵子

## Verda Monteto誌の 100号記念の原稿募集

1980年に新しい装いで始まったものが、前田さんの努力で隔月間を続けて約17年、まもなく、この機関誌も100号を迎えます。会員の皆さんの投稿、その他何でも、原稿を募集します。記念号だけでなく、いつでも原稿は歓迎します。

編集後記：わずか8ページのものでも、続けていくのはなかなか大変。今年は退職してから、エスペラントの活動一筋の江川さんがたくさんの記事を書いてくれました。また海南海市の田中さんの「回想」は当時の様子を伝える貴重なものです。多くの熱心な人に支えられて広がってきたエスペラント、12月の例年のザメンホフ祭を前にして、この世界共通語の誕生に思いを馳せたいものです。

オランダのコンスタンスさん（愛称はコニー）との2回目の出会い。今回は町の中よりはと言うので、生石高原を通過、有田の実家により、護摩壇山、高野龍神スカイライン、高野山と巡ったが、午後から出発したので奥の院に着いたのが5時前で、高野山ではゆっくりとできなくて残念だった。山はないというオランダから来たので、大変喜んでた。他には、交番を見に行ったり、近所の一人暮らしのお年寄りを訪ねたり、天理教の教会を覗いたり、最後は金屋町下六川のヤマギシム実顕地を見学したりで、通常の旅行者では体験できないものだった。67歳とのこと。これから日本語の勉強をしようとしている。何事にも興味を持って、何でもおいしく食べてもらい、本当に楽しい出会いでした。（福本）

和歌山 WAKAYAMA

Januaro, Februaro 1998

**VERDA MONTETO**

Redaktita de fukumoto hirotsugu (dumonata) N-ro 98

*el GUTO da ROSO la dua*

No. 1

誰のどの句の訳句かをあててください。随分変形されていますよ。 奥村林蔵

Ridu, rampu Hodiaŭ ci aĝas Jarojn du.	Printempo maro sin lulas tut-tage.	春の海 ひねもすのたり のたりかな
Bufo kvakas "Kie printempo?" en Tôsôdaiĵi.	Ploras je umbliko ŝnuro. Jarfino.	Ĉu nobelid'? ĉu vulpa feo printempa?
Kolz-floro ornamas kastelon de Kôrijama.	Anhele printempon kaptas mi Ŭaka-plaĝe.	

一つだけ思いついたので、元の句をつけてみました。合っているのかな？ 皆さんも元の句を考えてみませんか？ 思いついたら、福本までハガキか電話でご連絡ください。

次号以降に、新しい句の紹介と、前号に載せた元の句を日本語で対訳してみたいと思います。  
(福本)

午後にはベトナムテレビを訪問し、渉外部の副部長さんなどと会う。多くの建物は改修中で、パラボラアンテナが新しかった。テレビ塔はもう使われていないのではないと思うくらい古くて、これから建設し直す必要がある。写真にあるパラボラアンテナは新しい。

その後、ベトナム外文出版の関係者と会い、その建物の屋上にあるレストランで早い目の夕食をごちそうになる。ベトナム戦争の頃は、ここからエスペラントの本がたくさん出版されたので、中国と同様に職業的エスペランチストがいたことになる。ベトナムの建物は、地震がないからなのか、5階以上もあるビルも煉瓦を積み上げただけで出来ているようである。ハノイは建物の数の割には人口が急増してきたので、狭い建物にもたくさんの人が住んでいるとのこと。最近では外国人向けの住居が不足して、売り手市場のため家賃が大変高いそうです。

11日。朝のうちはホテルでVEAの役員と、第2回アジア大会、辞書の出版準備状況や今後の協力について話し合いをする。辞書は、①ベトナム語－エスペラント辞書、

(ベトナムテレビのパラボラアンテナの近くで、左端が HANESPE のホップさん)



(玉山祠の入り口でランさんと熊木氏。日本と同じく以前は漢字を使っていた。)



②エスペラントーベトナム語辞書、③エスペラントの語根から派生語を知る辞書の3つを出版できるように準備しているが、資金不足で具体的な出版計画は立っていないとのことである。

第2回アジア大会については、ハノイで開催したい意向であり、カムラン湾で青年合宿のような企画も実施したい考えも持っていた。私自身は外国から参加しやすい大会にしてほしいと思う。ハノイとホーチミン間の飛行機代も入れるとベトナム行きは比較的高くなるが、日本からも多くの参加を望みたい。ベトナムのエスペランチストは第2回アジア大会を成功させようと全力をあげているので、今回ベトナムを訪問した一人として日本の皆様にもできるだけの協力をお願いしたい。

午後は市内見物及び買い物で過ごす。泊まったホテルはホアン・キエム湖の近くなので、まず湖のそばにある玉山祠という、モンゴルの侵略を撃退したチャンフンダオなどが祀られている寺に行く。ここは湖の中の小さな島の中にあり、木の橋を渡って行く。ベトナムの寺には沢山の漢字が使われているが、今のベトナム人にはさっぱり分からない。案内してくれたランさんもフランス語や英語は分かるが漢字は全然分からない。(続く)

# — コピウエ だまり —

第1回



和歌山緑丘会の皆様 お元気でお過ごしですか？

チリ・サンチャゴへ来てから7ヶ月すぎようとしています。主人のチリ赴任に家族で同伴してきましたが、見るもの 聞くもの めずらしいことばかりです。

毎日とても忙しく、和歌山にいた頃よりも家事に精を出し、がんばっています。

時々、日本からの郵便りや日本のニュースが届くと本当に嬉しいです。地球の正反対の所でも日本人がくらししているなんて不思議ですネ。

日本の製品は、ここでも大変評判が良く、時計や計算機などを初めとして色々なものが輸入されています。de Japon (日本製)は何でも誇りにできます。

すばらしい製品をつくるために日本人がどれほど努力しているか、また、小さい頃から勤勉に励んでいるか、ということをチリの人たちは知っています。

これからも世界の国の一員として、先進国の名にはじない日本人になっていきたいと思います。また、いろいろな国のそれぞれの良さを知って、どんな国の人たちとも仲よく友だちになっていきたいですね。平和は一人一人の手でつくっていくものだと思います。



コピウエはチリの国花です。

日本人は知らないと思いますが、つる科の植物で 赤い小さな花が房のように下がって咲いています。

4月～6月頃 ちょうどこちらの秋の頃ですが、4cm位のかわいらしい花がたくさん見られます。本当に濃い赤い色をしています。

こちらの花々は本当にきれいで大きく、たくさん 鮮やかな色の花が見られますが、コピウエは小さくて野生の強い花です。チリの人たちが、この花を国花として愛していることがよくわかります。

厳しい自然の中で、寒い冬の前に美しく咲いている小さなコピウエの花は、日本の桜の花とは又ちがった印象的な花です。

楠 見 悦 子



1997.oct コンスタンスさんの和歌山再訪！



(ユネスコ協会の50周年記念で講演するコンスタンスさん。左は合唱団の子供達)

Verda Monteto誌の前号に、福本さんからコンスタンスさんの和歌山案内の報告がありましたので、その他の部分について報告します。

10月11日、私の長女の結婚披露宴に出席していただいて、日本の結婚式を体験してもらう。12日の朝、サンピアでコンスタンスさんを囲んで、松下、福本、亀井、橋口、米田の6名で懇談会を行った。午後は和歌山児童合唱団の父兄のお世話で日本の米秋を農家で体験した。その夜は、日本語の実地勉強ということで、ne-esperantistoの岡本宅に泊まる。

13日は、和歌山ユネスコ協会会長の松尾久さんのお世話で、木ノ本の獅子舞と宇治田空手道場を見学した。コニー（コンスタンスさん）の娘さんは空手をされていて、世界空手大会で銅メダルを獲得している。同夜は、ユネスコと児童合唱団主催の新地、浪漫亭での歓迎会に出席し、すき焼きとビールで5年前の和歌山児童合唱団オランダ公演の思い出話に花を咲かせた。15日は江川宅で過ごし、京都へ見送った。

11月1日に、和歌山ユネスコ協会創立50周年記念祝典にも招待され、再度和歌山に來られた。ここでは、オープニングセレモニーでの児童合唱団の歌の後、和歌山市長、各教育委員や近畿地区各県ユネスコ協会会長が居並ぶ前で、彼女がエスペ란ティストであること、児童合唱団のオランダ公演成功の功勞者であることが紹介された。晩餐会ではエスペラントと日本語で挨拶をした。

京都の西村那智子さん宅では、ホームステイしながら、近畿各地のエス会を訪問したり、日本語教室に通ったりしていたが、11月末、駅に向かう途中で転倒して肩を骨折したため、12月初旬に予定を繰り上げて関西国際空港より帰っていった。(江川治邦)

---

今年のザメンホフ祭は、京都からジョエルさん、和歌山ユネスコ協会の会長さん、和歌山医大の中国からの留学生の陳さんも含めて沢山参加された。ユネスコの話し、原水禁の話し、それにジョエルさんの指導で、簡単な単語を使って会話の練習。宮本さんの腹話術もあって、多くのプログラムで時間が足りなかった。関西エスペラント連盟からは、中道さんが重たい本を運んで来て販売してくれた。(途中で自動車が故障し、本を運ぶのは大変。中道さんご苦勞様でした。)木曜会の皆様、毎年毎年、色々と準備して下さり有り難うございました。(福本)





# LA MALGRANDA

( 小さな魔女 )

# SORĈISTINO



Bonefika leciono

( 役に立つ勉強 )

Dum kelkaj tagoj pluvadis senĉese. Tial la Malgranda Sorĉistino nur havis la eblecon vole nevole sidi en la ĉambro kaj oscedante atendi pli bonan veteron. Por pasigi la tempon ŝi kelkfoje sencele sorĉis: ŝi igis la nudelrulilon danci valson kun la fajrohoko sur la fornoplato kaj la rubajŝovelilon rulfali, la buterobarelon stari surkape. Sed ĉio ĉi ne kontentigis ŝin, baldaŭ tio ne plu plaĉis al ŝi.

Kiam ekstere la suno denove ekbrilis, la Malgranda Sorĉistino ne plu povis resti en la sorĉistina domo. "Ek!" ŝi kriis entrepreneme, "tuj for tra la kamentubo! Mi devas vidi, ĉu estas io sorĉinda!"

"Jes, sorĉu ion bonan antaŭ ĉio!" atentigis Abrakso. Kune ili rajdas super la arbaro kaj al la herbejoj. Tie ankoraŭ ĉie restis akvoflakoj. La kampvojoj estis ŝlimplenaj, kaj la kamparanoj vadis profunde ĝis la maleoloj en la marĉo.

何日か雨が降り続けました。それで小さな魔女はいやでも部屋にとじこもってあくびをしながらお天気がよくなるのをただただ待つばかりでした。

あてもなく時間つぶしに何回か魔法をかけてみました。だんろ柵の上でめん棒と火かき棒とでワルツを躍らせたり、ちりとりをころがしたり、バターつぼをさか立ちさせたり。でもこんなことはどれも満足できず、じきに飽きてしまいます。

外でふたたび日が輝きだすと、小さな魔女はもう家の中なんかでじっとしてられません。何かやりたくてうずうずして、「さあ! さっそく煙突から外へ! 何か魔法を使うことがあるか。さがさなきゃ!」

「そうだね。まず何かよいことに魔法を使いましょうよ」とアブラクソがひとこと注意しました。

魔女とからすはほうきに乗って、森や野原の上を飛んでいきました。森や野原にはまだあちこちに水たまりがのこっていました。野道はどろだらけで村人たちはくるぶしまでぬかるみにつかって歩いていました。

次号へ続く

(この記事の著作権は、前田先生が S-ino Yoshie Kleemannから載っています)

# 1997年 会計報告

(平成8年12月16日～平成9年12月5日)

## 収入の部

項目	金額	摘 要
前年度繰越	73,676	
会 費	99,000	当日会費11名 会費24人
会員割引	12,000	KLECT5600、JEI 6,400
預金利子	177	
	184,853	

## 支出の部

項目	金額	摘 要
通信費	42,680	
印刷費	59,976	
事務用品	16,281	
会議費	9,915	
	128,852	

収入の部	184,853
支出の部	128,852
	56,001

平成6年5月から和歌山緑丘会の郵便振替口座の番号が下記のように変更しましたのでお知らせします。

新口座番号

00960-8-3630

会計係 牛島美恵子



# VERDA MONTETO

Redaktita de fukumoto hirosugu

( *dumonata* ) *N-ro 99*

ベトナム訪問記 (その7)

1996. 12 福本博次



12日。朝からワゴン車でホア・ルーに遠足に行く。ここは968年から1009年の間、ベトナムの首都であったところだ。ディン王朝等の王様を祀っている寺が残っているが、戦争が続いたせいか、十分な手入れがされてなく、訪れる人も少ない。

ホアルーはハノイから南へ約100キロの位置にあり、ホンハ（紅河）デルタの平地を南へ国道を走った。道路は一部ホーチミンへ向かう線路のそばを走っているが、便数が少ないのか、貨物列車に1本に出会っただけであった。道路は周りよりも数メ

ートル盛り土をして作られている。こうしないと雨期や洪水で水につかってしまうのだらうと思う。湿地や沼沢地の中に土地を作るのは大変なことである。遠く田んぼの中には農村の集落が木立に囲まれて見える。農作業は手作業でやっている。ところどころ牛も見える。

ホアルーに近づくにつれ、あちこちに山が見えてきた。これらは平地に据え付けられたかのように、突き出た山ばかりだ。後でビッグドンでも見るような岩山ばかりである。寺の近くも水路がつながっていて家には舟がおいてある。ここでも雨期には水

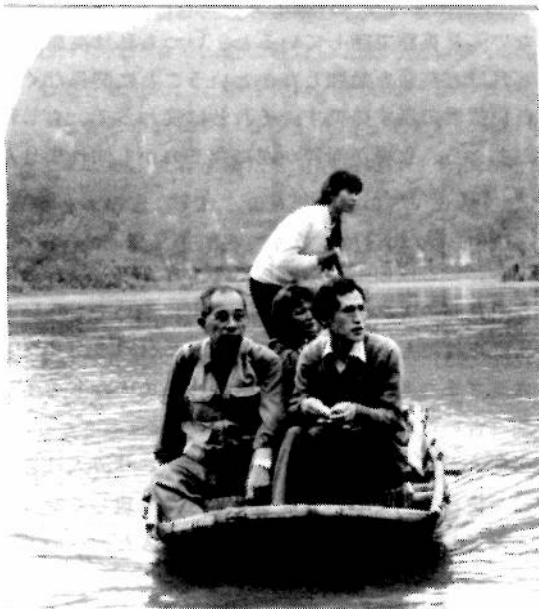


(山の形が変わっている。急な崖の上に野生のヤギが見えた)

に浸かってしまうのだろうか。このあたりには田んぼが見えない。寺の前では、おばあさんが線香を売りつけにくる。

この後はすぐ近くのビック・ドン (Bich Dong) に向かった。舟乗り場のそばのバスの待合所のような家で、持参のパン、ハム、缶詰、野菜などによるピクニック形式の昼食をとる。ここは陸のハロン湾といわれ、ここらの地域には切り立った岩山が沼沢地の中に突き出ている、景勝の観光地となっている。

小さな手こぎのボートに分乗して、往復3KMほどの行程で左右にこれらの山を眺める。途中山の下にできた洞窟を抜ける。ボートは竹を編んで作っているが、防水が悪いのか、我々の乗ったボートは少しずつ水が浸みてきてたまるので、時々すくいだしていた。大きな水音もたえず滑るように行く、騒音に馴れた耳には、この静かな舟



旅は何ともいえない気分になる。狭い浅瀬に稲を植えていたが、普通の水田は見られない。聞くところによれば比較的貧しい地域であり、刺繍が大きな仕事になっているらしい。帰りの舟では、積んでいる刺繍入りのテーブルカバーなどの販売をする。この村人は一月に約1回の割合で交替して、この仕事をしており、貴重な収入源となっているようである。



(私たちのボートのこぎ手はこの姉妹で、中学生とのこと)

(続く)

---

## アメリカ人なのに、なぜエスペラント？

---

私は日本にいるアメリカ人ですが、初めて私に出会った人たちは、私が英語でなくエスペラントで話しているのを知って驚いているのです。時には、私がほんとにアメリカ人なのか信じられないとまで申します。というのは、私がエスペラントだけでしゃべっているのを聞いたからなのです。

さて、アメリカ人の大多数は英語を使いたがるのはほんとうです。多くのアメリカ人は、英語でけっこう事足りるし、世界ではどの人も英語を学ぶべきだと考えているのです。では、なぜ私が、アメリカ人以外の人たちと話をするのにエスペラントを使うのか？そのわけを以下いくつか書いてみます。

### ☆ 友情 ☆

長い旅行中、私に英語で話しかけてくる人たちの大部分は、人間としての私にも、また私の生い立ち（来歴）にも、関心を持っていなかったことに気付きました。彼等の関心の第一はお金でした。私に何かを売ろうとしたり、私から英語を習おうとして、より高い教育や、より高給の地位などを得ようとしているのです。それとは対照的に、私とエスペラントで話し合う大部分の人々は、人間としての私、あるいは私の生い立ちについて関心をもっています。その人たちの多くは、私と友だちになろうとし、また事実その中の多くの人と友だちになりました。

## ☆ 平等 ☆

日本人やその他の国で英語を母国語としない人と英語で話していると、いつも私は英語達人の位置に必ず座らされ、そしてその相手がどれほど英語を勉強したかということに関係なく、生徒と先生とか、目下目上の人のような、低い位置で話すのです。それとは変わって、もし私と話し相手が、例えば日本語で話し合ったとしたら、立場が同等か逆になるのかも知れません。こういう不平等は、交友をはなはだ妨げます。

## ☆ とびらを開く ☆

長い世界旅行中、エスペラントは形の上でも、ことばの上でも、私にたくさんのとびらを開いてくれました。3年間の旅行中、私は150家庭のエスペランティストの家に泊めてもらいました。お金を払ってホテルで泊まったのは一晩だけでした！エスペラントとエスペランティストを通して、私は実に豊かな文化を楽しみ、さまざまな多くの人々と出会い、その人たちの生活、文化、家庭、考え方などに接して、親しく知り合いになることができました。

何年か友情が続いたあと、その親友たちの何人かは、私と出会うまでは、アメリカ人はきらいだったと打ちあけました。だから私が英語を使っていたら、今はもうすっかり親しくなったその友だちとは、きっと友だちになれなかったでしょう。エスペラントはその人たちへのとびらを開いてくれたのでした。

## ☆ 世界へ貢献 ☆

エスペラントをひろめる仕事をやりながら、私は何か世界へ役立つことをやっていると感じています。世界の人々が、自由に対等な人間どうしとして交流できるなら、そしてエスペラントによって友だちになれるなら、世界はきっとより良くなり、公正になり、共感し合えるでしょう。エスペラントだけであらゆる世界の問題が解決できるとは思いませんが、解決をやりとげようとする人々を助けることができます。

## ☆ 創作意欲 ☆

私はエスペラントを使うのが大好きです。エスペラントは創作意欲をより高めてくれるような道をつくってくれているからです。エスペラントには、大きな融通性があって、文を書いたり話したりするとき、英語とくらべて自由を感じます。英語の構造や語いは比較的固着しています。エスペラントでは、新しい表現を作り出す可能性はほとんど無限です。エスペラントが既にもっている素材を使って新しい表現法をさがしたり、ぴったりの表現をみつけたりするのは大きなよろこびです。

## ☆ 価値ある体験と自信 ☆

エスペラントによって開かれたとびらをくぐって、私は多くの価値ある生活体験を得ましたが、それはエスペラントなくしては容易に得られないものでしょう。そのような豊かな生活体験は、私の自信を大いに高めてくれて、世界の場でより適切に行動する心構えを私に持たせてくれました。

## ☆ 新しい世界観 ☆

エスペラントを使うことによって得た、恐らく最大の収穫は、私の世界観が急激に変ったこ



とです。以前は、世界を満たしているのはあかの他人ばかりだと想像していました。とても変わった人たちで、近よれないと思っていました。そういった「他人」にはあまり気を許すこともできません。というのは、そんな人たちは見知らぬ人びとだからでしょうね？

ところが、エスペラントを使っただけの私の体験で、この想像は大へんまちがったものだと気づきました。世界を満たしているのは、あかの他人ではなくて、私や私の家族と同じ人間なのです。その上、それらの人間の中のずい分多くの人たちは、私と出会い、知り合いになる機会があると、私と友だちになりたがるのです。だからその人たちは、あかの他人でなく、友だちか、将来友だちになる人々なのです。

なんと大きな違いでしょか！今や、私は世界中の人たちと現実には結ばれていると感じています。そして世界の一部分にだけとか、ひとつだけの言葉とか、ひとつだけの文化にだけにもはやしばられていないのだと感じています。世界中の人々につきあうことに私は自由なのです。どこにでも友情をもった人がいるし、エスペラントは、簡単に彼等と話し合える手段を私に与えてくれているからです。

JOEL BROZOVSKY (前田 訳)

## 一コピウエだまりー

第2回 < ナ ナ >



和歌山緑丘会の皆様

お元気でお過ごしでしょうか？ 学校は12月14日から1ヶ月間の夏休みになり、私もホッと一息ついているところです。

チリは、他の中南米の国々と同様で、習慣として中流以上の家庭では普通ナナというお手伝いさんを雇っています。家事一般のことをナナがしてくれます。日本の女中さんというような感じとは少しちがっていて、家事専門家というか、とにかく ナナという一つの仕事のプロとして存在しています。その家族のなくてはならない一員で、家の

こと一切仕切ってくれる頼りになるナナさんです。掃除、洗濯、子守り、料理と 奥様は殆ど手を出しません。デパルトでは主に通いですが、カサ(家)だと住込みのナナさんも多いです。お給料の他、食事や制服もその家で払っています。

しかし、我が家では今のところナナさんを雇っていません。デパルトは狭いし、日本食大好きな家族ですので、チリ料理はあまり食べません。

また、日本人にきてくれるナナはあまり評判がよくないこと、また、ナナの給料も最近が高くなっていて、節約のため、などなどの理由ですが、チリ人のお宅でテキパキと働いているナナさんたちをみると、とても羨ましいなあ～(ケ、エンビディア)と思います。

楠 見 悦 子

(和歌山県腹話術協会主催の、第16回腹話術発表会での、同会副会長宮本敏企さんの作品です。500人の聴衆を前にエスペラントの大変なPRになりました。またザメンホフ祭でも披露されましたが、実際に聞くととても面白いですよ。)

## 中国語・エスペラント・紀州弁

宮本敏企

花子：(チャイナ服で) ニーハオ!

敏企：おや、花子ちゃん、中国の衣装を着て中国語でご挨拶ですね。でも中国語ではどうして「こんにちは」を「ニーハオ」って言うの?

花子：ニッて笑って歯を出すからよ。ではこれから、中国語入門講座を始めます。中国語には4つのイントネーション、つまり音の上げ下げの調子があります。これを四声と呼びます。

敏企：一つずつ教えて下さい。

花子：一番目、第一声は高く平らに伸ばす。そして第二声は、驚いたときの「ええっ!」みたいに下から上へ上げる調子。三番は高いところからいったん下げて少し上がる。最後はカラスの鳴き声みたいに「カー」と落とす。

第一声 第二声 第三声 第四声

敏企：どう? 太郎君、分かったかい?

太郎：そんなの、和歌山弁にもあるで。

敏企：えっ、ほんと?

太郎：第一声は平らな調子、上がっても下がってもあかん。「胃(いー)」「血(ちー)」「気(きー)」。胃袋も血圧も気分も、上がり下がりは禁物。

敏企：なーるほど、理屈が通ってる。

太郎：第二声は上がって表へ出る。「手(てー)」「目(めー)」。

敏企：つい手が出る、目玉が飛び出る。

ふーん、出るもんは上がり調子か。

太郎：もう一つあった「屁(へー)」。それとは逆に、下がり調子の第四声は、抜けて落ちる。

敏企：太郎君の口元見て分かったぞ。「歯(はー)」やろ?

太郎：それとあんたに関わりの深い「毛(けー)」やな。

敏企：くやしいけど、ちゃんと筋が通ってるだけに文句が言えんわ。待てよ、第三声、いったん下がって少し上がるやつ、こんな和歌山弁にはないで!

太郎：おっしゃる通り、最近まではなかった。しかし、去年の秋にできた。

「あーあ、銀行つぶれてしもた!」

敏企：お気の毒でしたが、第三声はいったんは下がってもまた上がりますから気を落とさず頑張ってください! さて、中国語も結構、紀州弁の楽しいけど...

花子：みんなが共通のことばで話せたらすてきなのに!

敏企：そんな理想を現実のものにしたのが、エスペラント語です。誰にとっても平等で、偏りが無く、しかも容易に修得できることば、エスペラント語を一緒に学びませんか?

(1997. 1. 19 県民文化会館小ホール)



# LA MALGRANDA SORĈISTINO



( 小さな魔女 )

Bonefika leciono (役に立つ勉強) - 2 -

Ankaŭ la ŝoseo estis kotplena pro la pluvo. Venis ĉaro nun el la urbo. Ĝi estis tirata de du ĉevaloj kaj ŝargita per bierebaleoj. Sur la malbona strato ĝi nur malrapide formoviĝis. Ŝaŭmo gutis el la buŝegoj de la ĉevaloj. Ili pene klopodis tiri la pezan ĉaron. Sed por la biercaristo, sidanta sur la benko kun disetenditaj gamboj, la rapideco ne sufiĉis.

"Ho!" li kriis, "tiru do, vi bestaĉoj!"  
Kaj li batis senkompate per vipo la ĉevalojn-denove kaj denove.

"Tio ja estas punenda!" grakis Abrakso indignite.

"Tiu krudulo! Li draŝas la ĉevalojn kiel batmajstro! Ĉu tion oni povas pasive rigardi?" "Konsoliĝu", diris la Malgranda Sorĉistino, "li mallernos tion."

Ili sekvis la ĉaron, ĝis ĝi haltis antaŭ la bierejo "Al la Leono" en la najbara vilaĝo,

広道も雨でどろだらけでした。ちょうど町から荷馬車がやってきました。馬2頭でひっぱっていましたが、荷台にはビール樽が積んでありました。

道が悪いからのろのろと進んでいました。馬は大きな口からあわを出していました。重い荷馬車を引くのにけんめいでした。でも荷馬車のおじさんは、両足をひらいて馭者台にすわり、馬の歩みの遅いのが気にいりません。

おじさんはどなります。「オーラ! ひつぱらんかい、このど畜生め!」そう言っておじさんは馬をむちで情容赦なく何回も何回もなぐりました。

からすのアブラクソはおこってがなりました。「あれはいかんよ! おの乱暴者、むちの名人みたいに馬をなぐっている。あんなのだまって見られますか?」

小さな魔女は「まあおさえて。あの人はそれをいってもわからないのよ」

魔女とからすは荷馬車のあとについていきました。そしてとなり村の"AL La Leono(ライオン亭)" というバーの前まで来てとまりました。

(次号へ続く)

誰のどの句の訳句かをあててください。随分変形されていますよ。 奥村林蔵

Printempo pasas. Fiŝoj ĉu larmas?	行く春や 鳥啼 (とりなき) 魚の目は泪	Maj-pluvo. Sur river-bordo domoj du.
Sun-radio. Sanktas folioj. Juna verdo.	Kolz-kampo. Luno oriente. Suno ŭeste.	Sago-flue en maja pluvo Mogamigaŭa.
Diagonale kukolo flugas ĉef-urbon.	Verda foli'. En mont' kukolo. Ĝuu boniton.	目に若葉 山ほととぎす はつ松魚 (がっお)

前回掲載した俳句について、元の句をさがしてみました。有名な俳句ばかりですね。

- ① Ridu, rampu; Hodiaŭ ci aĝas; Jarojn du. 運え笑え、二つになるぞ、けさからは。
- ② Ploras je; umblika ŝnuro; Jarfino. 旧里(ふるさと)や、臍の緒に泣く、としの暮れ。
- ③ Ĉu nobelid'? Ĉu vulpa feo; printempa? 公達(きんだち)に、狐化けたり、宵の春。
- ④ Kolz-floro; ornamas kastelon; de Kôrijama. 菜の花の、中に城あり、郡山。
- ⑤ Anhele; printempon kaptas mi; Ŭaka-plaĝe. 行く春に、和歌の浦にて、追い付きたり。  
「唐招提寺の」入った句が見つかりません。だれか教えて下さい。 (福本)

前号 (No. 98) のザメンホフ祭の紹介で、中国からの留学生の名前が誤っていました。誤「陳さん」→正「荆さん」。また、コンスタンスさんの和歌山再訪の月が英語の綴りになっていました。誤「1997.oct」→正「1997.okt」。謹んでお詫びします。

最近、遠くの会員 (こちらから送りつけているようなものですから、こう呼ぶのも気が引けるのですが) の方から、会費とお便りをいただきました。どうも有り難うございました。原稿も募集していますので、どんな短いものでも結構ですからお送り下さい。機関誌とはいいながら、その役目を十分果たしていないのではないかと申し訳ない思いです。 (福本)

# VERDA MONTETO

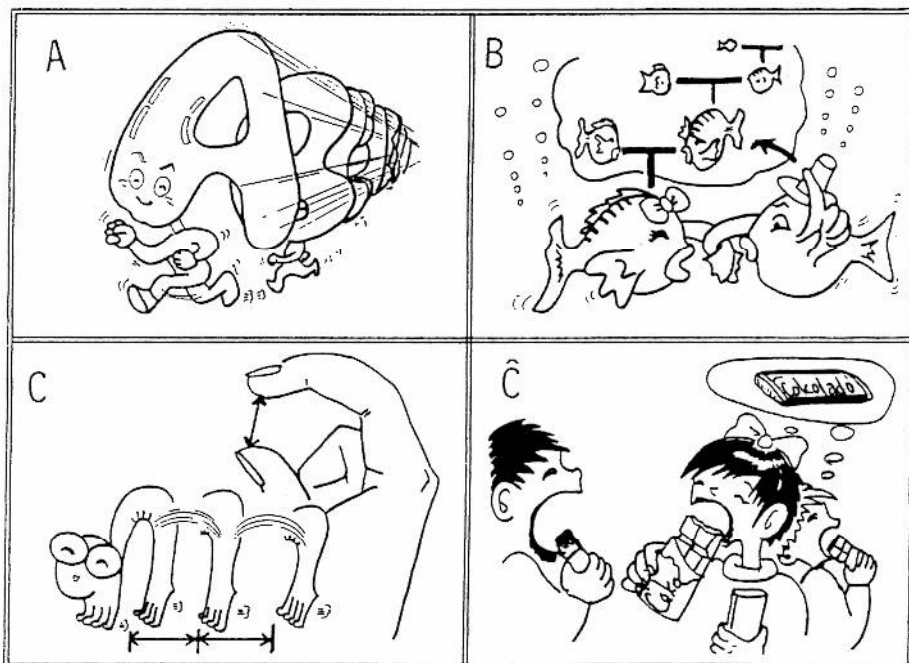
Redaktita de fukumoto hirotsugu (dumonata) N-ro 100

## ABC エスペラントかるた ESPERANTA LUDOKARTO

文：奥村林蔵

絵：松下享代

**A estas la unua litero Esperanta  
Bopatro estas la patro de l' edzin'.  
Colo estas tre mallonga mezur-unuo.  
Ĉokoladon ŝatas ĉiuj infanoj.**



## UEAの kampanjo 2000 と、地方エスペラント会のめざすもの

### -- Memore al la 100-numera eldono de Verda Monteto --

江川治邦

1987年、UEAは SWOT法により、エスペラント界の現状把握のために、その長所、短所を分析した上で、改善と前進のために3つの目標をキャンペーンに取り上げている。

1. エスペラント界の組織的、思想的水準の向上、2. 国際語の威信の向上、3. 国際社会への影響力の増大である。現代社会で<組織>といえば、人、物、金、情報、の効率で効果的なオーガナイズのことであり、それは、国際化、多様化、環境保全、市場社会、といった時代変化へのクイックリーな対応を可能たらしめ、自己の生存強化を図るためといえよう。このことは、営利企業だけでなく、現代は、大は国家から、小は文化クラブといえども、目標を持った団体は常に意識した行動を欠くと、衰退をまぬがれない。

最近、地方会で初等講習会を開いても受講生が10人以上集まらないと嘆く。2-3人が大半と聞く。この原因について、各種大会の分科会でいくつかの要因をすでに浮き彫りにしているが、私はやはりエスペラント側の広報宣伝力不足が最大のものと考えている。昔は、外国からエスペランチストがきた事だけで新聞記事となった。現代はそうではない。その外国人エスペランチストの特異性や、地域社会とのユニークな関係が重要となる。

私は長年、会社でセールスを担当してきた。新商品の販売に当たっては、必ず、イ. 類似品と比べて優れた点、ロ. ユーザーに、どれだけ利益がもたらされるのか、ハ. 使用実績の提示、を求められる。特に初めてのユーザーにとっては、価格と使用実績が気になるところだ。即ち、商品が如何に優れていても、ユーザーに使用方法の自由度(楽しさ)と全体メリットが容易に見えてこない場合、なかなか増販につながらない。従つて、近年は、業績の向上にあたり、よほどの差別化商品でない限り、商品開発といったハードな部分よりも、用途開発やルート開発といったソフトの部分の方がより重要視される。このことは、コンピューター産業をみれば明白である。換言すれば、エスペラントという新商品の販売も、ハードな面(商品や商品説明)よりも、もっとソフトに力点を置いた戦略の構築と、そこから導き出される実績提示が効果ある広報宣伝に結びつくのではないかと思う。

和歌山県では、毎年、文部省、県教育委員会と和歌山県ユネスコ連絡協議会主催の国際交流活動研修会が県下の国際交流諸団体参加のもとで開催される。多分にイベント的で受信型交流であるが、私は毎年この研修会に参加し、発言もし、諸団体との交流も深めてきた。エスペラントについて説明を求められたとき、私たちの活動は昭和初期より存在し、機関紙を発行し、市政100周年には和歌山市の民話<和歌山むかしむかし>を翻訳出版し、和歌山児童合唱団のヨーロッパ公演をエスペランチストのネットワークで実現させ、ベルリンの壁の崩壊後、ロシアの音楽家を招いて県下4都市で、市民との対話形式の演奏会を

開催し、姉妹都市の顔が見える記事を市民に提供出来ればと、ニュース和歌山の協力のものと、5都市の〈観光〉、〈教育〉、〈結婚〉、をテーマに連載したこと、最近、春林軒塾再建の機会に、絵本〈華岡青洲〉を、わかやま絵本の会や他の言語グループとタイアップして翻訳出版し、姉妹都市やアジアを中心とした諸外国に贈った等の実績を披露すると、地道で発信型の交流であり、国際理解への貢献に想像以上に寄与しているのではないかと、驚かれる。内容はともかく、地域の関心の高い、最も効果的で、時宜を得た実績作りは最大の説得力を持ちうるし、それだけにPR効果も大きい。〈華岡青洲〉出版のときは、NHKラジオで1回、和歌山放送で2回、新聞は5紙に報道され、わかやま絵本の会の機関紙（350部発行）にも掲載された。また、ニュース和歌山からは、10月7日付のコラム欄にエスペラント全般について書く機会を与えられた次第である。こんな事もあり、今夏、ビッグホエールで開催の第1回CIOFFアジア子どもフェスティバル in Wakayama には、県から、参加国の教科書展をエスペラント側でアレンジをと、依頼された。現在、アジア各国のエスペラント協会を通じ送られつつある。このような状況下で、1昨年に初級通信講座を始めたところ、15名の受講者があり、終講時には5名が自力で海外文通ができるコメントアットが生まれ、その内2名が緑丘会に入会している。また、昨年ザメンホフ祭の折り、新聞の〈会の案内〉欄を見たひとから、エスペラントを学びたいと突然の電話を受け、現在、2人が私の通信講座を受講中である。

多様化時代、エスペラントで楽しむことは個々人の自由である。しかしエスペラントは *majoritato* でなく、まだまだ *minoritato* の世界であることを認識して欲しい。そして、この言葉のすばらしさを感じたひとは、いつまでも *eterna komencanto* と言い張るのでなく、勉強をし、運動に向かってほしい。実力は運動と共に鍛えられるのである。

エスペランチストは、一つの言葉で多国の人々と容易に交流できるため、居ながらにして国際人である。しかし私たちの発展を考える場合、〈居ながらの国際人同志〉の *burakumado*（抱擁）は、私たちの周辺で起こっている国際化現象について無関心にさせ、保守化を招いていないか危惧するものである。日本経済のグローバル化によって、20数年前から市民の国際化行動がいろんな形で活発化しつつある。私たちはこの現実を直視する必要がある。一つの言葉で、複眼的視野を同時に持てる *interpopolano*（地球市民）として長期に育ててきた私たちの素晴らしノウハンを彼らに提供し、彼らと共に行動出来るものを提案し、地域社会に貢献して行くエスペランチストの姿勢が市民の日に映るとき、市民権を得たエスペラントが加速するかも知れない。

今夏、南フランスのモンペリエで開催の、第83回世界エスペラント大会に参加する。大会テーマは〈地中海――文化の架け橋〉である。プログラムも多彩だ。晩餐会のフランス料理のメニューも告知されている。プロバンス地方への一日遠足や、半日遠足は、有名美術館や古城、紀元前のローマ時代の旧跡や名所を各国参加者とおしやべりをしながら楽しみたいと思う。私は、妻と二人で、60日間の手造りヨーロッパの旅をこの機会にと決め込んでいる。途中、和歌山県の姉妹都市ペルピニャンに立ち寄り、ペルピニャンエス

ペラントセンターの同志と交流を深めることになっている。現代、和歌山県の民話の紙芝居や観光スライドを彼らに見ていただくための準備に追われている。歌や、踊りも披露したい。このことは、帰ってから新聞記事で市民にフィードバックするつもりである。

## 〜コピウエで〜

### 第3回 <チリの人々>



私がチリに来る前のラテンアメリカの人たちのイメージは、色々な本によると「人なつっこい」「情熱的」「底抜けに明るく、すぐアミーゴ（友達）になれる」等々だったのですが、ここに来てみての実感は全く違っています。

“超まじめ” “根くら”（なかなかジョークも通じません） “おとなしい” “忍耐強い” “用心深い” “頑固” “親切” “おしゃれ” といった言葉で表されると思います。ラテンというよりも ヨーロッパ的な性格といえましょう。

町の中でも日本人のように友達や仲間が集まってワイワイ ガヤガヤと騒ぐということはありません。レストランやパブの中でも静かにお話をしながら食事をしています。

チリの人たちがワッと大喜びしているのは、そう、サッカーのナショナルゲームの時や、独立記念日（9月18日）に、チチャというお酒をのんで、クウエッカを踊っている時くらいでしょうか。

16世紀からのスペインによる植民地化での先住民支配と移民の時代、次に独立や近隣国との領土所有権をめぐる戦い、近年では国の発展と近代化の中での自由主義、社会主義思想に対する軍部の圧力（チリの軍隊は強大な力を持っています。徴兵制度があり、第1次大戦以来 数ある戦争にも一度も負けていません）という歴史に加えて、相続く地震や天災から何度も立ち上がってきた不屈の精神、また、厳しい天候の変化（一日の天気さえも予測がむつかしいです）にも合わせるたくましさなど、チリの人々の一般的な性格も この国の風土と歴史に根ざしたものといえましょう。

（楠見悦子）



ホアルーからはだいぶ遅れてハノイに帰った。この夜はエスペッセン（ハノイ市内に8軒のミニホテルを持っている旅行会社）主催の夕食会であったが、会場に到着したのは予定時間を1時間以上過ぎていた。遠足に行った全員と、エスペッセンの役員、VEAの役員その他が参加する。場所は国際クラブというところで映画館の隣である。きれいなところであるが、入り口にあるダンスホールの音楽がうるさくて、挨拶があったがさっぱり聞こえない。ダン・ディン・ダムさんの詩の朗読もあった。

13日。朝早く空港に行きホーチミンへ飛ぶ。ホテルでしばし休憩の後、クチのトンネルの見学に行く。ここには総延長250KM以上になるトンネルが掘られている。ベトナム戦争の時に、ゲリラの住民が戦うために掘ったもので、その一部が観光用に公園にして、公開されている。観光客が通れるように広げてあるが、元はベトナム人がやっと通れる大きさで、大柄なアメリカ人が通れないように作ってあった。秘密の入り口、空気穴もあり、地下会議室、病室など地下にある部屋もつながっている。地上は大型爆弾の穴があちこちに残っている。ここは観光地になっていて多くのアメリカ人も訪れるそうである。



(エスペッセン主催の夕食会で)



(ホーチミンの戦争証跡博物館の米軍戦車の前で)

ベトナム人の長い長い戦いの跡を直接目にして、あらためて学生時代のベトナム戦争反対のデモのことなどを思い出した。ベトナムでも既に戦後20年である。戦争を経験しない若者が育っている。歴史を伝えることが重要である。

夜にはホーチミン市在住の、VEA副会長 S-ino Le Tuyet Thanh、中央委員の S-ro Tran Quan Ngoc、S-ro Nhiem の3名と出版予定の辞書のことなどについて話し合った。UEAの援助金が未だ来ないので出版に取りかかれないとのことであった。

14日。朝は市内で買い物など。午後にはホーチミンの友好協会連合会を表敬訪問した後、戦争証跡博物館を見学する。ここで、ベトナム戦争に反対した由井忠之進の焼身自殺の話になり、館長さんに会えることになった。遺品の展示などを知りたいということで、今後VEAを通じて熊木さんが連絡することになった。この博物館ではベトナム戦争の全貌を写真、武器、資料などで明らかにしている。ベトナム人の300万人の死者はもとより、遠くまで無意味な人殺しに来たアメリカ人も58000人の死者を出した。一体なんのための戦争だったのかと思う。

夜には送別会で沢山の人が集まってくれ、おまけにお土産まで貰ってしまった。夜遅くの便で帰国となったが、空港まで見送りに来てくれた。沢山の新しい出会いでベトナムを身近に感じるようになった。第2回アジア大会には是非とも皆さんにも参加して貰いたいと思う。

(完)

## 「一期一会」再録

Verda Monteto 97号の田中正美さんの「一期一会」を読者への宿題として読みました。言葉を学ぶ者にとって冥利に尽きるテーマです。重栖度哉さんの「ザメンホフのことわざ」の中から、数字を扱ったものを2点紹介します。

(1) 「一石二鳥」

Trafi du celojn per unu ŝtono.

(2) 「一か八か」

Trafe aŭ maltrafe.

(1) では数字をそのまま取り込んでいる

が、(2) では本意を得た表現で、韻を考慮した配列になっています。

「一期一会」は、日本語のように数字で簡単に訳したいのですが難しい。そこで、私は以下のようにしました。

◎ Tutkora renkonto eĉ unufoja

ol senkora renkonto ĉiufoja.

◎ Kiom da renkontoj en rutino.

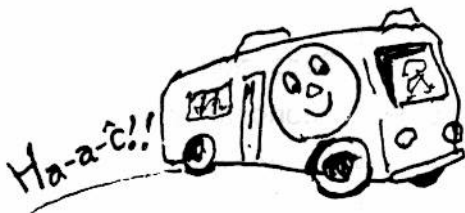
ne tiom da renkontoj al bela amatino.

◎ Tiel tutkore, kiel unua renkonto

estus lasta.

以上、読者諸兄のご意見を期待する

(江川治邦)



## Terno

MAEDA Y.

Mi estis unusola japano en Postkongresa turisma aŭtobuso. Mi ternis iom tro laŭte kaj impone, kion mia mortinta patro heredigis al mi. En la buso regis subite senzuma silento.

Mi sentis min riproĉita kaj ekparolis:

"Japana proverbo diras ke ...la unua terno signifas, ke iuj laŭdas min. La dua terno signifas, ke iuj malamas min, kaj la tria terno signifas, ke mi estas mal-var-mu-ma!"

Kaj en la buso eksplodis ridego kaj mi estis fiera, ĉar mia mizera Esperanto estas unuafoje komprenita de eksterlandaj esperantistoj!

誰のどの句の訳句かをあててください。随分変形されていますよ。 奥村林蔵

Falkon mi trovis alte nubo-fende.	鷹ひとつ 見付けてうれし いらご崎	Ranideto! Ne malvenku, mi ĉi tie.
Sen sono. Cikadan ĉirpon roko sorbas.	Eke ĝoje fine morne ĉe Nagara kormoranoj	おもしろうて やがて悲しき 鶺舟かな
Mez-aŭtun'. Kion metias najbaro?	Homa vivo similas roson, sed tamen...	Pura luno. Tutan nokton ĉe laĝeto.
Ĉe branĉo korbo silentas. Aŭtuno.	枯朶 <small>(かれえだ)</small> に 烏のとまりたるや 秋の暮.	Persimono Sonoras eĥe el Hôrjuuji

前回掲載した俳句について、元の句をさがしてみました。有名な俳句ばかりですね。

- ① Maj-pluvo. Sur river-bordo domoj du. さみだれや、大河を前に、家二軒。
- ② Sun-radio. Sanktas folioj. Juna verdo. あらたふと、青葉若葉の、日の光。
- ③ Kolz-kampo. Luno oriente, suno ŭeste. 菜の花や、月は東に、日は西。
- ④ Sago-flue en maja pluvo Mogamigaŭa. 五月雨（さみだれ）を、集めて早し、最上川。
- ⑤ Diagnale kukolo flugas ĉef-urbon. (未だ見つからず)

最後の句が見つかりません。だれか教えて下さい。

(福本)

